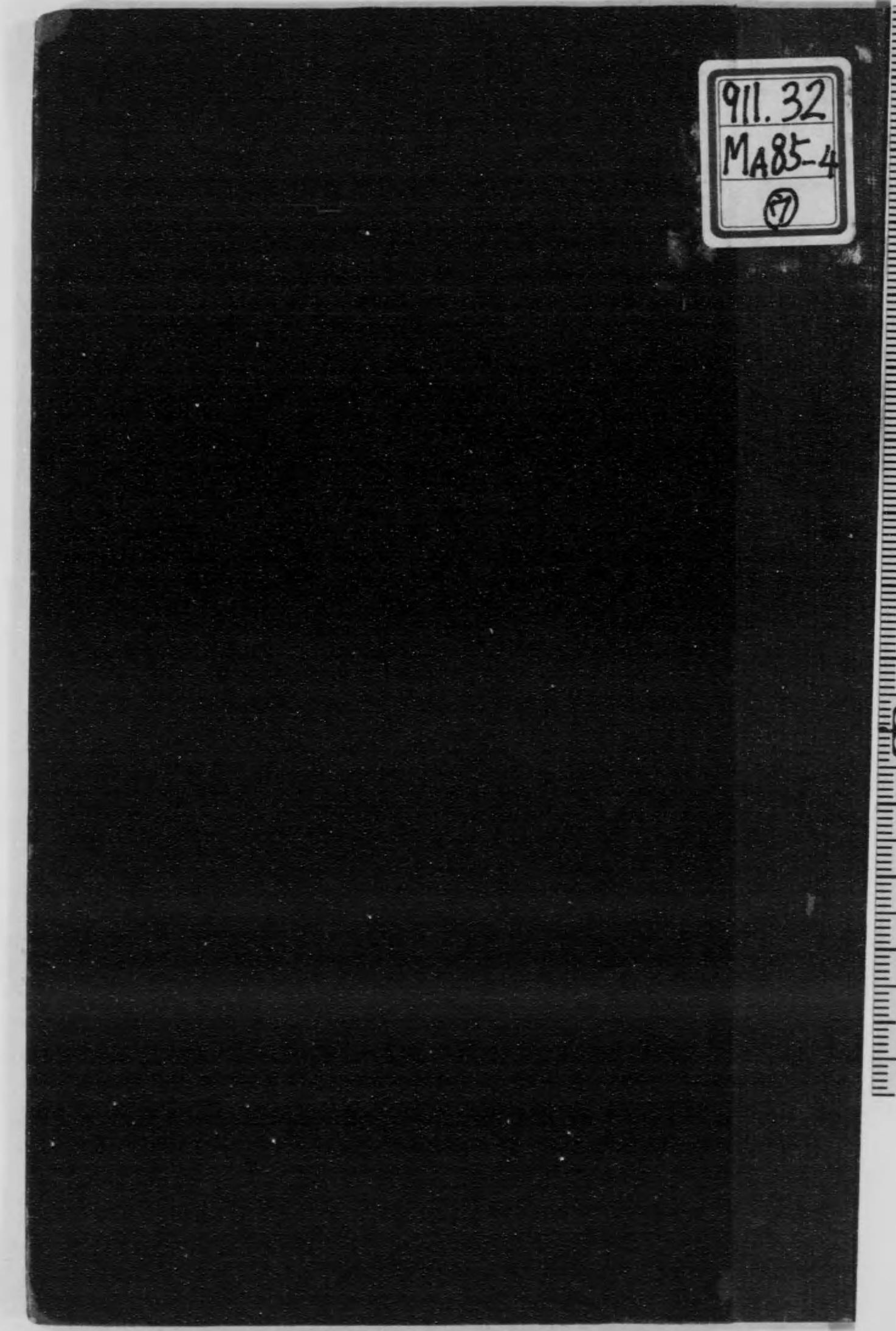


始

臼田亞浪監修
石原健生編

# 芭蕉全集

東京 越山堂版

帝國圖書館藏
911.32
MA85-4
大正 14. 3. 30 内交

530-113

# 目次

## 類題芭蕉俳句集

### 新年及春之部


初日の出 三　正月 三　元日 三　歳旦 三　立春 三
春 三　今朝春 三　花の春 三　千代の春 三　君が春 三
宿の春 三　若夷 三　春駒 三　庭竈 四　松飾 四
門松 四　鏡餅 四　歯朶 四　蓬莱 四　恵方 四
年玉 四　筆始 四　子日 四　七種 四


### 春之部

#### 乾坤

凍解　五
氷解　五
雪間　五
霞　五
陽炎　五
暮遲　五
春風　六
貝寄風　六
春雨　六
朧月　六
朧　六
春の夜　六
暮春　六
二月　六
次郎月　六
行春　六
夏近し　七


## 草木


若菜　七
薺　七
芹　七
土筆　七
若草　七
春草　七
蒲公英　七
蕗の薹　七
野老掘　七
萱　七
獨活　七
海苔　七
梅　八
紅梅　一〇
柳　一〇
椿　一一
待花　一一
初花　一一
初櫻　一一
櫻　一一
山櫻　一一
八重櫻　一二
絲櫻　一二
姥櫻　一二
犬櫻　一二
櫻狩　一二
花見　一二
花雲　一二
花　一二
落花　一六
花守　一六
花の山　一六
桃　一七
菜の花　一七
薺花　一七
山吹　一七
薊　一七
菫　一七
躑躅　一八
荻若葉　一八





蘖生　一八
種芋　一八


## 生類


猫の戀　一八
白魚　一八
獺祭魚　一八
鶯　一八
雲雀　一九
燕　一九
雉子　一九
歸雁　一九
雀子　一九
鳥巣　一九
蛙　一九
蝶　一九
田螺　二〇


## 衣食


畑打　二〇
茶摘　二〇
種蒔　二〇
接穗　二〇
蠶　二〇
潮干　二〇
阿蘭陀渡る　二〇
草餅　二〇


## 祭祀


初午　二一
彼岸　二一
涅槃會　二一
水取　二一
峯入　二一

春雜　二一

# 夏之部

## 乾坤

四月　二一
五月　二一
五月富士　二一
六月　二一
短夜　二二
夏の雨　二二
五月雨　二二
梅雨　二三
水無月　二三
明易　二三
夏月　二三
暑　二四
夏の夜　二四
雲峯　二四
風薫　二四
涼　二四
清水　二六
夏山　二六
夏野　二六
夏の海　二七
瀧　二七
秋近き　二七

## 草木

牡丹　二七
杜若　二七
罌粟　二七
麥　二八
若葉　二八



木下闇　二八
夏木立　二八
茂　二八
柚花　二九
卯花　二九
橘　二九
藤實　二九
椎花　二九
筍　二九
菖蒲　二九
花菖蒲　二九
田植　二九
早苗　三〇
紅の花　三一
鐵線花　三一
紫陽花　三一
百合花　三一
罌麥　三一
瓜花　三一
茄子　三一
蓼　三一
竹植　三一
桑實　三一
栗花　三二
樗花　三二
合歡花　三二
李　三二
蓮　三二
晝顔　三二
夕顔　三二
水葱　三二
葎茂る　三二
瓜　三三
眞桑瓜　三三
新麥　三三
散松葉　三三
一つ葉　三三
忘草　三三
玉卷芭蕉　三三
夏草　三四

## 生類

鰹　三三
杜鵑　三四
閑子鳥　三五
行々子　三五
老鶯　三五
鵜飼　三五
鹿袋角　三五
蝸牛　三六
蠅　三六
蚊　三六
蟾　三六
螢　三六
水鷄　三六
木啄　三七
水鳥巣　三七
蟬　三七
蚕　三七
夏蟲　三七

## 衣食


更衣 三七　織 三七　粽 三七　青さし 三七　土用干 三七
氷室 三七　汗 三七　簟 三八　團扇 三八　心太 三八
道明寺 三八　扇 三八　夏羽織 三八　夏座敷 三八　帷子 三八
夏衣 三八


## 祭祀


灌佛 三八


## 夏雜


夏雜 三八


# 秋之部



## 乾坤


文月 四〇　今朝秋 四〇　初秋 四〇　來る秋 四〇　殘暑 四〇
身に入 四〇　稲妻 四〇　七夕 四一　星合 四一　銀河 四一
二百十日 四一　露 四一　霧 四二　秋の山 四二　秋の野 四二
野分 四二　秋風 四二　八朔 四四　夜寒 四四　秋暮 四四
三日月 四四　下弦 四五　名月 四五　今日月 四六　月見 四六
十六夜 四六　月 四七　宵月夜 五〇　後の月 五〇　名殘月 五〇
行秋 五〇　暮秋 五〇


## 草木


散柳 五〇　木槿 五一　桐一葉 五一　朝顔 五一　蘭 五一
秋海棠 五一　女郎花 五一　芭蕉 五二　荻 五二　萩 五二
芒 五二　角觝草 五二　蔦 五二　鬼灯 五三　草花 五三

瓢 五三
綿 五三
芦 五四
松茸 五四
木の實 五六
葱 五三
冬瓜 五三
蜀黍 五四
茸狩 五四
榎の實 五七
蔦紅葉 五三
芋 五三
栗 五四
早稲 五四
橡 五七
紅葉 五三
芙蓉 五四
蕎麥花 五四
落穂 五四
柿 五七
蕃椒 五三
雁來紅 五四
初茸 五四
菊 五四
零餘子 五七

## 生類

蟲 五七
きりぎりす 五七
竈馬 五七
蜻蛉 五七
蓑蟲 五八
鶺鴒 五八
鴫 五八
鹿 五八
稲雀 五八
渡鳥 五八
四十雀 五八
雁 五八
鰍 五八
紅葉鮒 五八

## 衣食

硯洗 五八
扇置 五九
角觝 五九
駒迎 五九
砧 五九
簗掘 五九
稲刈 五九
升市 五九



## 祭祀

盆 五九
墓參 六〇
魂祭 六〇
八朔 六〇
御靈宮 六〇

## 秋雜

秋雜 六〇

# 冬之部

## 乾坤

小春 六三
時雨 六三
冬の空 六三
木枯 六三
霜 六四
雪 六四
雪見 六六
雪圍 六六
雪丸け 六六
氷 六七
冬枯 六七
櫓田 六七
枯野 六七
山眠 六七
霜 六七
霰 六八
寒さ 六八
師走 六九
寒 六九
年暮 六九

行年 七〇　年波 七〇

## 草木

散紅葉 七〇　落葉 七〇　木の葉 七〇　返花 七一　麦蒔 七一
蕎麦刈 七一　大根 七一　枯草 七一　枯葱 七一　枯尾花 七一
冬牡丹 七一　水仙 七二　寒菊 七二　早咲 七二　探梅 七二

## 生類

乾鮭 七二　河豚 七二　生海鼠 七二　鴨 七二　千鳥 七三
鷹 七三

## 衣食

冬籠 七三　爐開 七四　口切 七四　火燵 七四　圍爐裏 七四
火鉢 七四　火桶 七四　炭 七四　埋火 七四　頭巾 七四





紙衣 七五　蒲團 七五　衾 七五　霰酒 七五　節季候 七五
煤掃 七五　餅搗 七五　餅花 七五　衣配 七五　古暦 七五
年忘 七五　年取物 七六　年の市 七六

## 祭祀

神の留主 七六　神の旅 七六　夷講 七六　御命講 七六　鉢敲 七六

## 冬雜

冬雜 七六

## 無季

無季 七七

## 芭蕉文集


十八樓記……八一
幻住庵記……八一
幻住庵賦……八四
芭蕉を移す詞……八七
成秀が庭上の松をほめる詞……八八
月見賦……八九
既望賦……九一
伊賀國新大佛之記……九二
紙衾記……九三
酒落堂記……九三
柴門辭……九四
送許六辭……九五
送僧專吟詞……九六
更科姨捨月之辨……九七
栖去之辨……九七
煤掃之說……九八
閉關之說……九八
あら野集序……九九
銀河序……一〇〇
伊勢紀行之跋……一〇一
虚栗集跋……一〇一
蓑蟲跋……一〇二
澁笠銘……一〇三
瓢之銘……一〇四
机之銘……一〇五
座右銘……一〇五

自得箴……一〇五
閑居箴……一〇五
杵折賛……一〇六
西行上人像賛……一〇七
卒都婆小町賛……一〇七
石臼頌……一〇八
雲竹自畫像……一〇九
贈風絃子號……一〇九
贈洒堂……一〇九
與或人文……一一〇
烏之賦……一一〇
東順傳……一一一
嵐蘭誄……一一三
弔初秋七日雨星……一一四



## 紀行集

奥の細道……一一七
鹿島紀行……一四一
芳野紀行……一四四
野晒紀行……一五七
更科紀行……一六六

## 日記

嵯峨日記……一六九

## 句評

貝おほひ……一七九

初懐紙……二〇一
田舎の句合……二二五
常盤屋之句合……二三八
續の原……二四三

## 書簡集

書簡……二四五



# 類題芭蕉俳句集

# 新年及春之部

## 新年

初日の出　伊勢に居て見るそらいかに初日の出

正月　正月も美濃と近江や閏月

元日　元日やおもへば淋し秋の暮

元日は田毎の日こそ戀しけれ

歳旦　年々や猿に著せたる猿の面

歳と申の世の中よかれ酉の年

立春　はるたつや新年ふるき米五升

はる立てまだ九日の野山かな

春　於春々大哉春云云

今朝春　庭訓の往来誰が文庫よりけさの春

嵐雪が贈りたる正月小袖をきたれば

---

誰やらが姿に似たりけさの春

空の餘波をしまんと舊友の來りて酒興じけるに元日の晝迄臥あけぼのみはづして

花春　二日にもぬかりはせじな花の春

京ちかき所に年をとりて

こもを著て誰人います花の春

千代の春　伊勢が竇家にも來たり千代の春

君が春　かひたんもつくはゝせけり君が春

宿の春　發句也芭蕉桃青宿の春

若夷　年や人にとられていつも若夷

わが年を棚へあげてや若ゑびす

春駒　しほしりの尻もすはらぬ春の駒

高きやにのほりて見ればの御製のあ

りがたきを今も猶
庭竈　叡慮にて賑ふ民や庭かまど
庵にありて
松飾　いく霜にこゝろ芭蕉の松かざり
門松　門松や思へば一夜三十年
鏡餅　歯朶の葉もなきに餅の鏡かな
元朝感あり
歯朶　餅を夢に折詰歯朶の草枕
山家迎春
誰聟ぞしだに餅負ふ丑の年
蓬莱　蓬莱にきかばやいせのはつ便
恵方　恵方から曳や今とし の牛の玉
年玉　もて來つる是ぞ年玉こゝろ玉
湖頭の無名庵に年をむかふ時三日口

を閉て頭四日
筆始　大津繪の筆の始や何佛
子日　子日しに都へゆかん友もがな
七種　四方にうつ薺もしどろもどろかな



# 春

## 乾坤

よし野西行庵
凍解　凍とけて筆に汲ほす淸水かな
氷解　勢ひなりこほり消ては瀧つ魚
雪間　山は猫ねぶりはいくや雪のひま
季吟勸進卷題
霞　和哥の跡とふや出雲の八重霞
奈良にて
春なれや名もなき山の朝霞
この繪かきたる人は檜倉何がし外
記とて十三才なるよし筆のはこび
美しかりければざれ句書はべる
霞やら花の雲やら煙やら
大日えやしの字引捨一かすみ
夕かすみ赤石の浦を帆のおもて
陽炎　枯芦やまだかげろふの一二寸
伊賀新大佛寺
丈六にかけろふ高し石のうへ
嗒山旅宿
陽炎のわが肩に立紙衣かな
かけろふや柴胡の原の薄くもり
野分室の八島にて
いとゆふに結ひつきたるけふりかな
入かゝる日もいとゆふの名殘かな
暮遲　くれ遲き四谷過けり紙草履
遲き日にかわらぬ綱の左り袖

春風　はる風やきせるくはへて船頭殿

奈良に出て

春かせや人聲うつる三笠山

名所八體のうち

寄貝風　貝よする風の手しなや和哥の浦

笠寺奉納

春雨　笠寺やもらぬ窟も春の雨

よし野西行庵

はる雨の木下に傳ふしづくかな

はる雨や蓬を伸す草の道

赤坂庵にて

不性さやかき起されし春の雨

春雨や蓑吹かへす川柳

はる雨や蜂の巣つとふやねの漏

はる雨や二葉にもへる茄子種

朧月　花の顔にはれうてしてや朧月

朧　辛崎の松は花よりおぼろにて

初瀬にて

春の夜　春の夜や籠り人床し堂の隅

暮春　入相の鐘もきこえずはるのくれ

鐘つかぬ里は何をか春のくれ

二月　さゝげたり二月中旬はつ茄子

二月十七日神路山を出るとて

裸にはまだきさらきの嵐かな

次郎月　去年ははやそこへすされよ次郎月

行春　ゆく春に和哥の浦にて追付たり

留別

行春や鳥鳴魚の目は涙



望湖水惜春

行春を近江の人とをしみける

白川は春のすゑなり旅まくら

夏近し　夏近し其口たばへ花の風

## 草木

若菜　こんにやくにけふは賣かつ若菜かな

薺　古畑になつなつみ行男ども

一とせに一度つまるゝなつなかな

石川北鯤生の舎弟山店子我つれづれ慰んとて芹の飯にさせて深川迄持來る是に青泥坊底の芹にやあらんと其代の侘もいまさらに覺ゆ

芹　我ためか鶴哺のこす芹の食

悲しまんや墨子せり焼をみても猶

芹焼やすそ輪の田井の初氷

土筆　まふくたが袴よそふかつくづくし

圓角扇に讃を望むに

若草　前髪もまた若草の匂ひかな

若草や狼かよふ道ながら

春草　木曾の情雪や生ぬくはるの草

蒲公英　たんほゝや鶴も來てつめ松の風

蕗の薹　園ひろき德ありてこそふきのとう

菩提山

野老掘　山寺の悲しさ告よところ掘

苣　ちさ摘て貧なる女機による

獨活　雪間よりうすき紫の芽うどかな

海苔　箸の先に花咲せけり櫻のり

# 梅

老情

蠣よりはのりをは老の賣もせて
おとろひや歯に喰當しのりの砂

淺草千里が澤にて

のり汁の手つき見せけり淺黄椀
この梅に牛も初音と鳴つべし
古郷の梅や難波の二年ごし
うめがかやしらゝおちくぼ京太郎
さかりなる梅にすて引風もかな

竹内一枝軒にて

世に匂へ梅花一枝のみそさゝい
ある人の草の戸を尋待りけるによ
所に出るよしにて年老たるをのこ
ひとり留主を守り居けるに垣根の
梅盛なりけるを是なんあるしと言
ければその男隣の梅にて候と申に
興うしなひ歸待るとて
留主にきてうめさへ餘所の垣根かな

伊賀のあるかたにて

旅鳥ふる巣は梅に成にけり

訪山住

うめ白しきのふや鶴を盗れし
梅咲てよろこぶ鳥のけしきかな
うめ折て椿にまかふ袂かな
山里は萬歳おそし梅の花

奈良にて

阿古久曾の心はしらすうめの花

卓袋亭月待



月待や梅かたけ行小山伏

山家

手沸かむ音さへ梅のさかりかな
伊賀の山家にうにといふ物あり土
底より掘出して薪とす石にもあら
ず木にもあらず黒色にしてあしき
香ありそのかみ高梨野也是を考日
本草に石炭と云物ありいかに申傳
て此國にのみ燒ならはしけんいと
めづらし
香に匂へうにほる岡のうめの花
一とせ都の空に旅寢せし頃道にて
行脚の僧に知人になり待るに此春
みちのおく見に行とて我草庵を訪
ければ
又もとへ藪の中なるうめの花

子良館のうしろに梅有といへば

御子良子の一もとゆかしうめの花

網代民部が息に逢て

梅の木に猶やとり木や梅の花
里の子ようめ折のこせ牛の鞭

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北のうめ

元夜

春もやゝけしきとゝのふ月と梅
人も見ぬ春や鏡のうらの梅

去來が方へ亡人の事など云遣すとて

蒟蒻のさし身も少し梅の花

何かし新八去年の二月身まかりしを一周忌のほとに父梅丸子のかたへ申つかはしける

うめがかにむかしの一字あはれ也

梅がかにのつと日の出る山路かな

うめ咲や臼の挽木のよき曲り

梅の風俳諧國に盛なり

主なきを恨みがほなる野梅かな

待ちかねて鄰の梅を折りにゆく

梅がかに追ひもどさるゝ寒かな

常のはなし遁れにけりな梅の花

梅に尾長鳥の畫讃

此花のあるじ顔なり尾長鳥

## 紅梅

紅梅や見ぬ戀つくる玉簾

## 柳

あちこちや面々さはき柳髪

餅雪をしら絲となす柳かな

在原寺にて

鶯を魂に眠るか嬌やなぎ

猿雖に對して

もろ〳〵の心柳にまかすべし

古川にこひて芽を張柳かな

吹度に蝶の居なほる柳かな

賭社國

笠の緒に柳絡る旅出かな

譃ものにさはる柳のしなへかな

はる雨いとしづかに降て頓て晴たる頃遠きあたりなる柳見に行けるに春光きよらかなる中に滴いまだ



なやみなければ

八九間空て雨降やなぎかな

雨中

傘に押分みたる柳かな

入口は柳にのほるよし野かな

## 椿

鶯の笠落したる椿かな

葉にそむく椿や花の餘所心

落さまに水こほしけり花椿

逃水やつばきながるゝ竹の奥

## 待花

まつ花や藤三郎がよしの山

## 初花

はつ花にいのち七十五年ほど

伊賀上野藥師寺初會

## 初櫻

はつさくら折しもけふはよき日なり

明みたす桃の中より初さくら

顔に似ぬ發句も出よ初櫻

## 櫻

逢故人

命ふたつ中に活たるさくらかな

探丸子別莊

さま〳〵の事おもひ出す櫻かな

乾坤無住

よし野にてさくら見せうぞ檜笠

聲よくば歌はんものをさくらちる

山家

鵠の巣は嵐の外のさくらかな

扇にて酒くむかけや散さくら

木の本に汁も鱠も櫻かな

春の夜は櫻に明て仕舞けり

## 山櫻

草履の尻折て歸らん山さくら

初瀨にて人々花見けるに
うかれける人やはつ瀨の山さくら

よし野にて
やまさくら瓦ふくもの先ふたつ
歌よみの先達多し山さくら

上醍醐
留主といふ小僧なふらん山櫻

勾空への文に
うらやまし浮世の北の山さくら
暮れかぬる日のゆかしさよ山櫻
八重櫻　奈良七寺七堂伽藍八重櫻
絲櫻　いとさくらこや歸るさの足もつれ
半日の雨より長しいとさくら
姥櫻　姥さくら咲や老後のおもひ出

犬櫻　吹風は尾細くなるや犬櫻
櫻狩　さくらがり氣とくや日々に五り六り
似あはしや豆の粉めしに櫻がり
思ひ出す木曾や四月の櫻がり
花見　艶なる奴花見や誰哥のさま
てきちよくにもてゝふ來るや花見酒
京は九萬九千群集の花見かな
景淸も花見の座には七兵衞

踏通が陸奥に赴く時
草まくらまことの花見しても來よ

玄虎子の深川の旅舍を訪
花見にとさす舟遲し柳原

上野の花見にまかり侍しに人々幕打ちさはき物の音に小うたの聲さ



まゝなりにけるかたはらの松かけを賴て
四つ五器のそろはぬ花見心かな

毘沙門堂の花盛四王天の榮花も是にはいかで增るべきうへなる黑谷下河原むかし遍昭僧正の浮世をいとひし花頂山わしのみやまの花の色枯にし鶴の林までおもひしられてあはれなり

花雲　觀音の甍見やりつ花のくも

草庵
はなの雲鐘は上野か淺草か

僧專吟餞別
鶴の毛のくろき衣や花の雲

蝶鳥のうはつきたつや花の雲

上野の奥
花　花に醉り羽織著て刀さす女

憂方知酒聖貧始覺錢神
花にうき世我酒しろく食黑し
うち山や外樣しらずの花盛
蝙蝠も出よ浮世の花に鳥
紅毛も花に來にけり馬に鞍

花のもとにて發句望れはべりければ
花に明ぬなげきや我が歌ふくろ
はる風に吹出し笑ふ花もがな
盛りしや花にそゞろうき法師ぬめり妻
世にさかる花にも念佛まうしけり

訪山住

榲の木の花にかまはぬすがたかな

花咲て七日鶴見るふもとかな

物皆自得

花に遊ふ虻な喰ひそ友すゝめ

あすは檜とりや谷の老木のいへる事有きのふは夢と過て空はいまだ来らず只生前一樽のたのしひの外にあすは〳〵と云くらして終に賢者の譏をうけぬ

さひしさや花のあたりのあすならう

瓢竹庵に膝をいれて旅のおもひいと安かりければ

花を宿に始終や二十日ほと

瓢竹庵より旅立ける日

このほとを花に禮いふわかれかな

古沓や花の旅出の拾ひはき

龍門二句

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

よし野

はなさかり山は日ごろの朝ほらけ

しはらくは花の上なる月夜かな

草尾村にて

花のかけ謡に似たる旅ねかな

葛城のふもとを過るに四方の花にて峰々は霞わたりたる曙のけしきいと艶なるにかの神のみかたちあしゝと人々の口さがなく世に云傳へ侍れば

猶見たし花に明行神の顔

貞享五年きさらきの末伊勢に詣つ我御白砂の土をふむこと既に五たひに及侍りぬひとつ〳〵としのくはわれるにさてかけまくもかしこきおゐん光も思まされる心地してかの西行の涙の跡をしたひ増賀のまことを戀しひて内外の御前にぬかつきながら袖しほるはかりになん侍る

何の木の花とはしらずにほひかな

裸にはまだ衣更着の嵐かな

踏草亭

紙衣のぬるとも折らん雨の花

藤堂蕉木子にて

土手の松花や木深き殿つくり

支考の陸奥へ下るを送る

此こゝろ推せよ花に五器一具

尾張の門人より淡酒一樽木曽の獨活茶一種おくりけるを人々にすゝむるとて

呑明てはな活にせん二升樽

示門人

子に飽と申人には花もなし

露沾公にて

西行の庵もあらんはなの庭

桜風を花にかんじて居たるかな
櫻をはなと寢所にせぬそ花に寢ぬ
はるの鳥の心よ
花に寢ぬこれもたくひか鼠の巣
坦堂和尚を悼
地に倒れ根による花の別かな
孤石がみちのくに行を送る
むぐ起に鄰の花のにほひかな
花のかけ硯にかはるまる瓦
人の氣や花に乘行くさくら川
花咲てあるじ二人の庵かな
萬乎別荘
年々や櫻をこやす花のちり
すへたのしひよくの中は花に鳥

落花　聲よくばうたはむものを櫻ちる
先知や宣竹が尺八に花の雪
洒落堂記に
四方より花吹いれて鳰の湖
扇にて酒くむ影やちるさくら
熊山の需にて探雪か畫し琴の讃
ちる花や鳥もおとろく琴の塵
風なきに散るやわかきの花さくら
伊賀の國花垣の庄はそのかみ奈良の八重櫻の料に付られけると云傳へ侍れは
花守　一里はみな花守の子孫かや
嵐山
花の山　花の山二町のほれば大悲かく



伏見西岸寺任口上人に逢ふて
桃　我衣に伏見の桃の雫せよ
頃へば餅こそ喰はねもゝの花
尚白と浪華へ下る
たゞ一夜もゝに宿かる木幡かな
古寺の桃に米ふむ男かな
舟あしもやすむ時あり濱の桃
滿上下あかぬ千日や桃の花
菜の花　菜はたけに花見顔なる雀かな
薺花　よく見れば薺花さく垣根かな
大和行脚の時丹波市とかやいふ所にて日のくれかゝりけるに藤の覺束なくさきこほれけるを
藤　草臥て宿かるころやふぢの花

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵をたづねて
留主に來て棚さがしする藤の花
氏もよし生立もよしや藤の花
山吹　山吹の露菜の花のかこち顔なるや
西河
ほろ〳〵とやま吹ちるか瀧の音
畫讃
山吹や宇治の焙爐の匂ふ時
やまふきや笠にさすべき枝の形
薊　花は賤の目にも見へけり鬼薊
菫　山路來て何やらゆかしすみれ草
悼呂丸
當歸より哀は墳のすみれ艸

茶店
躑躅　つゝじ活て其かげに干鱈裂く女
逢龍尙舍
荻若葉　ものゝ名を先とふ荻の若葉かな
此筋にのぞまれたる茅舍の畫讃
芭蕉植て先にくむ荻の二葉かな
葎生　葎さへわか葉やさしや破れ家
藪椿門はむぐらの若葉かな
種芋　たね芋や花の盛に賣ありく

## 生類

猫の戀　ねこの妻竈の崩よりかよひけり
まとふとな犬ふみつけて猫の戀
田家
麥めしにやつるゝ戀か猫の妻
ねこの戀やむ時閨のおぼろ月
白魚　藻にすだく白魚やとらば消ぬべき
あけぼのや白うをしろき事一寸
常陸下向に江戸を出る時送り人に
鮎の子のしらうを送る別かな
蜆子讃
白魚や黒き目をあく法の網
しらうをに價あるこそうらみなれ
獺祭魚　獺のまつり見て來よ瀨田の奥
相國寺にて
鶯　鶯に感ある竹のはやしかな
うぐひすや柳のうしろ藪の前
鶯や餅に糞する緣の先



梅干にかよふ黄鳥あはれなり
雲雀　ながき日をさへづりたらぬひばりかな
原中やものにもつかず鳴雲雀
臍峠
ひばりより上にやすらふ峠かな
ひと日〳〵麥あからみて鳴雲雀
燕　煤ほりて挨拶く家に鳴つばめ
楠部
盃に泥な落しそむら燕
花に來て花野にかへる燕かな
壁土の家する木曾のつばめかな
雉子　燧石と啼かはしたるきゝすかな
高野
父母のしきりに戀しきじの聲
雲雀鳴中の拍子やきじのこへ
蛇くふと聞ばおそろしきじの聲
遁世の詞
歸雁　雲と隔つ友かや雁の活わかれ
雀子　すゝめ子と聲鳴かはす鼠の巣
鄰庵の僧宗波旅に趣けるを
鳥巣　ふる巣たゞあはれなるべき鄰かな
蛙　古池やかはづ飛こむ水の音
蛙子は目すり鱠を啼音かな
蝶　もろこしの俳諧問はんとぶ胡蝶
莊子畫讃
怒雖が製しておくりける筆の誠に
よろしければ
君やてふ我や莊子の夢心

もの好やにほはぬ草にとまる蝶
てふの飛ばかり野中の日影かな

乍木亭

蝶の羽の幾度こゆる塀のやね
起よ〳〵わが友にせんぬる小蝶

田螺　袖よこすらん田にしの蓋のひまをなみ

芳野を下る時

飯貝や雨にとまりて田螺きく

## 衣食

木白亭

畑打　はたけ打音やあらしの櫻麻
茶摘　摘けんや茶を古枯の秋ともしらで
種蒔　この種とおもひこなさし唐からし

接穂　捨物に梨の接穂や山やしき
雛　内裡ひな人形天皇の御宇とかや

はるけき旅のそら思ひやるにもいさゝかも心にさはらん物むつかしけれは日頃住ける庵を相知れる人に譲て出ぬ此人なん妻を具し娘孫抔持る人なりければ

草の戸も住かはる世ぞ雛のいへ

重三

潮干　青柳の泥にしたるゝ汐干かな
清水ほど海のながるゝ汐干かな
阿蘭陀渡る　阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

草庵に桃櫻有門人に其角嵐雪有

草餅　雨の手に桃とさくらや草の餅



## 祭祀

二月吉日とて是橘が剃髪して醫門に入を賀す

初午　はつ午に狐のそりし天窓かな
彼岸　けふひがん菩提の種を蒔日かな

伊勢にて

去年見たる花賓に來る彼岸かな
涅槃會　神垣やおもひもかけすねはん像
ねはん會や皺手合する珠數の音

二月堂

水取　水取やこもりの僧の沓の音
峯入　みね入や一里おくるゝ小山伏

## 春雜

うめ柳さそ若衆かな女かな

乙州東武行餞別

梅若な鞠子の宿のとろゝ汁
かぞへ來ぬ屋敷〳〵のうめ柳

二見の圖を拜みて

うたがふな潮の花も浦の春
梅柳わたすか年の御擔もの
春風に吹出し笑ふ花もがな
霞やら花のくもやらけふりやら
打ちよりて花入探れ梅椿

杵折の讃

此槌のむかし椿か梅の木か

# 夏

## 乾　坤

四月　思ひ出す木曾や四月の櫻狩

五月　海ははれてひえ降の寺五月かな

奥州名取の郡に入て中將實方の塚はいづくにやと尋侍れは道より一里半はかり左の方笠島といふ所にありとをしふ降つゝきたる五月雨もいとわりなく打過るに

笠島はいづこさつきのぬかり道

さつき三十日の富士の思ひ出らるゝに

五月富士　日にかゝる時やこと更五月ふじ

六月　六月や峯に雲おくあらしやま

短夜　みぢか夜や驛路の鈴の耳につく

夏の雨　檜山や柴してもどる夏の雨

五月雨　五月の雨岩檜葉の雫いつ迄ぞ

さみたれに御物遠や月の顔

五月雨も瀬ふみ尋ぬみなれ川

さみたれや龍燈あける番太郎

五月雨や此笠杜をさしもくさ

病中自詠

髭生て容顔青し五月雨

五月雨にかくれぬものや瀬田のはし

阿武隅川の水源にて

さみたれは瀧降うづむ水かさかな

中尊寺にて



五月雨に降のこしてや光堂

さみたれを集めて早し最上川

日の道や葵かたふく五月雨

落柿舍額破

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

さみたれや蠶わづらふ桑の畑

露川へ申侍る

さみだれに鳰の浮巣をみに行ん

五月雨風しきりに落て大井川水出侍りければとゝめられて島田に逗留す如舟如竹などいふ人のもとにありて二句のうち

五月雨の雲吹おとせ大井川

野に臥こともたのしきやなど主の問ければ

さみたれに寒いまゝ也旅姿

梅雨　降音や耳もすうなる梅の雨

信濃の洗馬

入梅はれのわたくし雨や雲ちきれ

くたれる世にもと云けんことはりなりや杉風が採茶庵にすみて

水無月　雪の河綠左勝水無月の鯉

水無月は腹病やみの暑かな

水無月や鯛はあれとも鹽鯨

みなつきやから鮭をがむ野栖山

明易き　足洗てつい明易き丸寝かな

明石夜酒

夏月　蛸壺やはかなき夢を夏の月

手を打はこだまに明る夏の月
なつの月御油より出て赤坂や
松島や水を衣裳に夏の月

暑

蛤の口しめて居るあつさかな
あつき日を海に入たり最上川

曲翠亭にて

夏の夜　夏の夜やくづれて明しひやしもの
夏の夜や木霊に明る下駄の音

出羽月山

雲峯　くものみねいくつ崩て月の山

本間主馬が亭にまねかれしに太夫が
家名を稱して二句のうち

ひらくとあくる扇や雲の峯
湖や暑を惜しむくもの峯

風薫　風の香も南に近し最上川

游力亭

漣や風のかをりの相ひやうし

羽黒山にて

ありがたや雲をかをらす南谷

小倉山院

松杉をほめてや風のかをる音

石川丈山之像

風かをる羽織は衿もつくろはす

涼　箔押よとちも身のため夕涼
皿鉢もほのかに闇の宵すゞみ

住ける人の外にかくれて葎生じける
古跡を訪て

瓜つくる君かあれなと夕すゞみ



文鱗子出山の像を贈られければ

南も佛草の臺もすゞしけれ

小夜の中山にて

いのちなりわづかの笠の下涼
松風の落葉か水の音すゞし
破風口に日かけや弱る夕涼

風瀑餞別

わすれずは小夜の中山にてすゞめ

十八樓記あり略す

此あたり目にみゆるもの皆凉し

清風亭

すゞしさを我宿にしてねまる也
すゞしさやほの三日月の羽黒山

袖の浦眺望

あつみ山や吹浦かけて夕凉
汐越や鶴脛ぬれて海凉し

花のうへこへとよみ給ひける古き櫻もいまた干滿寺のしりへに殘りて影浪をひたせる夕晴いと凉しければ

夕はれや櫻に凉む浪のはな
小鯛さす柳すゞしや海士が軒

四條の河原の納凉とて夕月夜の頃より有明過るころ迄川中に床をならへて夜すがら酒のみ物食あそふ女は帶の結めいかめしく男は羽織長う著なして法師老人ともにまじはり桶屋鍛冶屋のてしこまでいとま得顔にのゝしるさすかに都の氣色なるべし

川風や薄柿著たる夕凉

曲翠亭に遊て田家といへる題を置て

飯あふぐかゝが馳走や夕すゞみ

川中の根木によころぶ凉かな

野水新宅

すゞしさは指圖にみゆる住ひかな

雪芝亭

凉しさや直に野松の枝の形

東武より上りて人々に對す

東路の毛ずねはづかし床すゞみ

野明亭

すゞしさを繪に寫けり嵯峨の竹

百里来るほどは雲井の下凉し

清水 さゞれ蟹あし這のほる清水かな

岐阜山にて

城跡や古井の清水まづとはん

那須の温泉明神相殿に八幡宮を遷し奉りて兩神一方に拜れ給ふ

湯をむすふちかひも同じ石清水

むすぶよりはや歯にひゞく清水かな

那須の光明寺にて

夏山 夏山に足駄を拜む首途かな

夏山や紙すく里は飯じぶん

なつ山や杉に夕日の一里鐘

甲斐の郡内といふ所に至て途中の吟

夏野 馬ぼく〳〵我を繪に見る夏のかな

落梧のぬし稚きものをうしなひける



を悼みて

もろき人にたとへん花も夏野かな

馬草負ふ人をしをりの夏野かな

松島

夏の海 島々や千々に碎けて夏の海

うらみの瀧

瀧 しばらくは瀧にこもるや夏の始

大津木節亭にて

秋近き 秋ちかき心のよるや四疊半

## 草木

尾張より東武に下る時

牡丹 ほたん蕊深く分出る蜂の名残かな

桃鄰新宅自畫自讃

寒からぬ露やほたんの花の蜜

散るときもあればこそあれ廿日草

杜若 かきつばた似たりや似たり水の影

こゝも三河むらさき麥の杜若

大阪にて

かきつばた語も旅のひとつかな

山崎宗鑑屋敷にて近衞殿の宗鑑かすがたを見ればかきつばたと遊しけるを思ひ出て心の中にいふ

有がたきすがた拜まんかきつばた

鳴海知足亭

杜若我に發句のおもひあり

手のとゞく水際うれしかきつばた

罌粟 白げしや時雨の花の咲きつらん

贈杜國
しろけしに羽もぐ蝶のかたみかな
須磨
海士の顔まづ見らるゝやけしの花
名所八體の内
麥
秋や須磨須磨や秋しる麥日和
逢桑門
いざ共に穗麥喰はんくさ枕
甲斐にて
行駒の麥になぐさむやどりかな
むぎの穗や涙に染て鳴雲雀
五月十一日武府を出て故郷に赴く人
々川さきまで送來て餞別の句をいふ
其かへし
麥の穗をたよりにつかむ別かな
若葉
招提寺
わかはして御目の雫ぬぐはばや
日光山
あら尊青葉わかはの日の光
須磨
木下闇
須磨寺にふかぬ笛きく木下闇
雲岸寺
夏木立
木つゝきも庵はやぶらず夏木立
幻住庵
先たのむ椎の木も有夏木立
大垣の城主日光御代參勤させ給ふに
扈從する岡田氏何某に寄
茂
篠の露袴にかけし茂かな



嵐山藪のしげりや風の筋
落柿舍
柚花
柚の花に昔をしのぶ料理の間
悼大顚和尚
卯花
梅戀てうの花拜む涙かな
其角母五七日追善
卯の花も母なき宿ぞすさまじき
うの花やくらき柳の及ごし
駿河の國に入て
橘
するが路や花たち花も茶の匂ひ
關の住素牟何がし大垣の旅店を訪れ
侍りしにかの藤しろみたりといひけ
ん花は宗祇の昔に匂て
藤實
ふぢのみは俳諧にせん花の跡
許六が木曾路におもむく時二句のう
ち
椎花
椎の花の心にも似よ木曾の旅
小督墳にて
筍
うきふしやたけのこと成人の果
たけのこや稚き時の繪のすさみ
菖蒲
あやめ生り軒の鰯のされかうべ
留別
あやめ草たしに結はん草鞋の緒
俗士にいざなはれて五月四日吉岡求
馬を見る五日はや死すと聞て
花菖蒲
花あやめ一夜に枯し求馬かな
芦野
田植
田一枚うゑて立さる柳かな

みちのくの名所々々心に思ひとめて
まづ關屋の跡なつかしきまゝにふる
道にかゝりていまの白川もこしぬや
がて岩瀬郡に至て乍單齋等躬子の芳
扉を敲くかの陽關を出て故人に逢な
るや

風流のはじめや奥の田植哥

尾張の舊友に對て

世を旅に代かく小田の行戻り

織田氏の亭

柴つけし馬のもどりや田植さけ

岱水亭

早苗　雨をり〳〵おもふ事なき早苗かな

奥州今の白川に出二句

西か東かまつ早苗にも風の香

早苗にも我色くろき日かずかな

しのぶの郡しのぶの里とかや文字摺
の名殘とて方二間ばかりなる石あり
この石はむかしの女がおもひに石と
なつてそのおもてに文字ありとかや
山藍すりみたるゝ故に戀によせて多
くよめり今は谷間に埋て石のおもて
に下さまに成たれはさせる風情も見
えずはべれ共さすかにむかしおほへ
てなつかしければ

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

手ばなせば夕風わたる早苗かな

清風亭二句



紅の花　行末は誰が肌ふれん紅の花

眉はきをおもかけにして紅の花

發心の時

鐵線花　散はちれ千里一風の鐵線花

子珊亭

紫陽花　あちさゐや藪を小庭の別座敷

紫陽花や帷子時のうす淺黄

百合花　うつくしき其ひめゆりや后がさね

罌麥　醉て寢んなでし子咲る石の上

正成が像

鐵肝石心此人之情

なてしこにかゝる涙や楠のつゆ

阿野松波宅にて古き長瓢に瓜の花を
いけて下に無弦の琴瓱を置て花生よ
り落る雫を撥面にうけたり

瓜花　瓜の花雫いかなるわすれくさ

花と實と一度にうりの盛かな

幻住庵にこもれる頃

夕にも朝にもあらずうりの花

重行亭

茄子　めづらしや山を出羽のはつ茄子

島田にて二句の中

苣はまだ青葉ながらになすび汁

己百亭

藜　やとりせん藜の杖になる日まで

木因亭竹醉日

竹植　降ずとも竹うゑる日はみのと笠

桑實　くはの實や花なき蝶の世捨酒

訪隱者

栗花　世の人の見つけぬ花や軒のくり

道芝にやすらひて

樗花　とんみりとあふちや雨の花くもり

きのふけふ樗にくもる山路かな

合歡花　象潟や雨に西施かねふの花

李　すもゝ青く竹笠破て石あふなし

本間主馬が亭に招れしに太夫が家名を稱して二句のうち

蓮　はすの香に目をかよはすや面の鼻

枝なくて世にかゝはらぬ蓮かな

雨の矢に蓮を射る芦戰へり

晝顔　ひるかほに米つき涼むあはれ也

奇香亭にて

ひる顔のみしか夜眠る晝間かな

子供等よ晝顔さきぬ瓜むかん

平田李由がもとへ文の音信に

晝顔にひるねせうもの床の山

晝がほの花にねふたき庵かな

夕顔　夕がほに見とるゝや身もうかりひよん

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

ゆふ顔や醉て顔出す窓の穴

夕かほに干瓢むいてあそびけり

夕顔やかいまはるほど秋は来ぬ

水葱　なまくさしこなぎが上の鮠の腸

甲斐山中

葎茂る　山賤のおとがひ閉るむくらかな

落梧何かしのまねきに應じて稻葉山



松の下凉みして長途の愁をなくさむほとに

瓜　山かけや身を養はん瓜はたけ

去來が別莊にて

朝露によこれて凉し瓜の泥

うりの皮むいたところや蓮臺野

花と實と一度に瓜のさかりかな

眞桑瓜　闇の夜を狐下はふ玉眞桑

はつ眞桑たてにやはらん輪にやせん

柳行李片荷は凉し初眞桑

之道に對して

我に似なふたつに割し眞桑瓜

新麥　新麥や竹の子時の草の庵

散松葉　清瀧や波にちりこむ青松葉

一つ葉　夏來てもたゞ一つ葉の一葉かな

忘草　淋しさよ右もひだりもわすれ草

玉卷芭蕉　青苔や玉まく芭蕉一株二株

殺生石にて

夏草　石の香やなつ草赤く露暑し

高館にて

なつ草や兵どものの夢のあと

## 生類

鰹　また越ん小夜の中山はつかつを

かつを賣いかなる人を醉すらん

鎌倉を生て出けんはつかつを

名にしおへる鵜飼といふものを見侍らんと暮かけていさなひ申されしに

人々稲葉山の木かけに席を設け盃を
あけて

鮎

又たくひなからの川のあゆ鱠

杜鵑

なけや鳴耳のすうなる郭公
ほとゝきすいまだ俳諧師無世かな
口すべれ油月夜のほとゝきす
戸の口に宿札なのれ子規
黒焼釜わつて捨けり時鳥
しばし間も待やほとゝきす千年
清く聞ん耳に香焼て子規
ほとゝきす正月は梅の花さかり
岩つゝじ染る涙やほとゝきす
ほとゝきす啼や黒戸の濱ひさし
橋やいつの野中のほとゞきす

鐵蓋が峯にのぼる二句
須磨の蜑の矢先に鳴や時鳥
ほとゝきす消行方や島ひとつ
郭公啼々飛そいそかはし

裏見の瀧
ほとゝきすうら見の瀧のうら表

みちのく一見の桑門同行山人邦須の
しのはらを尋て殺生石見んと急侍る
ほどに雨ふり出けれは先此所に留る
落來るや高久の宿の時鳥
木隠て茶摘も聞やほとゝきす

那須野にて
野を横に馬ひきむけよ子規

不卜一周忌琴風興行



ほとゝきす鳴音や古き硯箱
子規聲横たふや水の上
京にても京なつかしや郭公

嵯峨にて
ほとゝき大竹藪をもる月よ
時鳥まねくか麥のむら尾花
ほとゝきす啼や五尺のあやめ草

さし竿書たる扇に
鳥さしも竿や捨けんほとゝきす

仙臺にて
田や麥や中にも市の子規

笈負僧
見へはやな出立〱の郭公
あけほのやまた朔日にほとゝきす

烏賊賣の聲まきらはし杜宇
見かへりの松の木末やほとゝきす
きのえ子に寝て待つほどぞ子規

閑子島

うき我をさひしからせよかんこ鳥

行々子

能なしのねむたし我を行々子

四たひむすひし深川の庵を立出ると
て

老鶯

うぐひすや竹の子藪に老の鳴

鵜舟もとほりすぎたる程にかへると
て

鵜飼

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな
桒たやと子の聲くらきうふねかな

別舊友

鹿袋角

二またにわかれ初けりしかの角

誠に須磨明石のそのさかひははひわたるほどといへりける源氏のありさまも思ひやるにそ今はまほろしの中に夢をかさねて人の世の榮花もはかなしや

蝸牛　かたつぶり角ふり分よ須磨明石

許六が木曾路におもむく時二句の中

蠅　うき人の旅にもならへ木曾の蠅

秋の坊を幻住庵にとゝめて

蚊　我宿は蚊のちひさきを馳走かな

清風亭

蟾　はひ出よ飼屋の下のひきのこゑ

螢　晝見れば首筋あかきほたるかな

愚にくらく荊をつかむほたるかな

木曾路の旅おもひたちて大津にとゞまる頃瀬田の螢を見にいでて

このほたる田每の月にくらべ見ん

草の葉を落るより飛ほたるかな

上林三入亭

ほたる見や船頭醉ておぼつかな

おのか火を木々のほたるや花の宿

白川に住何かしに文をつかはすはしに

水雞　關もりの宿を水雞に問はうもの

大津湖仙亭

この宿は水鷄もしらぬ扉かな

露川がともがら佐谷まで道送してともに隱士山田氏が亭にかりねす



くひな鳴と人のいへはや佐谷泊り

木啄　木啄の柱をたゝくすまひかな

水鳥巢　闇の夜や巢をまどはして鳴千鳥

蟬　梢よりあだに落けり蟬のから

稲葉山

しづかさや岩にしみ入せみの聲

無常迅速

頓て死ぬけしきはきへす蟬の聲

撞鐘もひゞくやう也蟬の聲

木陰に蟬ばかり動く夕かな

尿前山家

蚤　のみ虱馬の尿する枕もと

夏蟲　夏のむしうなぎ饒く日を知らぬかな

## 衣食

更衣　ひとつ脱てうしろに負ぬ更衣

醫王寺にて

幟　笈も太刀も五月にかされ紙幟

粽　ちまきゆふ片手にはさむ額髮

青さし　青さしや草餅の穗に出つらん

千子が身まかりけるを聞てみのの國より去來が方へ申遣し侍りける

土用干　なき人の小袖もいまや土用干

かけて置く拂子はちゐの土用干

新居風流亭

氷室　水の奥氷室尋ぬる柳かな

汗　汗水やよし野とまりの笈山伏

光明寺にて

あせの香に衣ふるはん行者堂

簟　晋の淵明をうらやむ
窓なりに萱緩の臺やたかむしろ
　鏧齋うしろ向の像
世の中をうしろになして山里にそむ
きはてゝも黒染の袖といふに

扇團　うちはとつてあふかん人のうしろ向
　野明亭

心太　清瀧の水汲よせて心太
　不卜の母追善

道明寺　水むけて跡とひ給へ道明寺

扇　不士の風や扇にのせて江戸みやけ

夏羽織　別ればや笠手にさけて夏羽織
　秋鴉亭の佳景に對す

夏座敷　山も海もうごき入るゝや夏座しき

杉風生夏衣いと滑らかに調しておく
りければ

帷子　いでや我よききぬ著たり蟬衣
　歸庵

夏衣　夏衣いまだ虱をとりつくさす

## 祭祀

灌佛　灌佛や皺手あはする珠數の音
　奈良にて
灌佛の日に生れあふ鹿子かな

## 夏雜

　武隈の松にて
櫻より松はふた木を三月ごし

書
音



辨慶は夏も紙衣の羽織かな
遠淺やなつの日の出の舟こゝろ
　須磨二句
月を見ても物たらはすや須磨の夏
月はあれど留主のやう也須磨の夏
　松島
松しまや夏を衣裳の水と月
　井狩氏水樓
世の夏や湖水にうかふ浪のうへ
かたられぬ湯殿にぬるゝ袂かな

# 秋

## 乾坤

直江津にて

文月　文月や六日も常の夜には似ず

今朝秋　はりぬきの猫に見えけりけさの秋

鳴海眺望

初秋　はつ秋や海も青田の一みどり

初秋やたゝみながらの蚊帳のよき

来る秋　秋来にけり耳にたづねて枕の風

あき来ぬと妻乞ほしや鹿の皮

殘暑　牛部やに蚊のこゑくらき殘暑かな

江上の破屋を出るとて

身に入　野さらしを心に風のしむ身かな

寄李下

稻妻　いなつまを手にとる闇の紙燭かな

宿敦賀

あの雲は稻妻をまつたよりかな

或智識の曰くなま禪大疵のもとゐとかやいとありがたくて

いなづまに悟らぬ人の貴さよ

粟津にて

いなづまや湖のおもてをひらめかす

本間主馬が宅に骸骨ともの笛鼓をかゝまへて能する所を畫て舞臺の壁にかけたりまことに生前の戯れなどか此遊にことならんや彼髑髏を枕として終に夢うつゝをわかたさるものも只



この生前をしめさるゝものなり

いなつまや顔のところかすゝきの穗

稻妻や闇の方行五位の聲

七夕　月弓や婿の一藝男たなはた

たなはたのあはぬこゝろや雨中天

何かしの御代官隠身して四國へ趣く人に

たなばたやはたか硯のにはか旅

野童亭にて

七夕や秋をさだむる初めの夜

名所八嶹のうち

星合　ほし合の中やたゝなんたつた川

合歡の木の葉こしもいとへ星の影

素堂の母七十あまり七としの秋七月七日にことふきするを萬葉の七くさをもて題とす是につらなる者七人このの結緣にふれて各又七叟の齢にならはん

七株の萩の手本や星の秋

弔雨星

高水に星も旅寢や岩の上

銀河　水草ものりものかさん天の川

出雲崎にて

あら海や佐渡によこたふ天の川

嵐雪が四國にわたる時

二百十日　旅からす二百十日も船支度

芳野西行庵にて

露　露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

畫讃
西行の草鞋もかゝれ松のつゆ
曾良にわかる
けふよりや書付けさん笠の露
二見のうら
硯かとひろふやくぼき石の露
一草庵の席上饗應を制して
白露のさびしき味をわするかな
磯の宮も森の露ちるあさひかな
乳母草に誰むすべとて朝の露

## 霧

於君崎
松なれや霧えいさゝえいと引程に
崑崙の遠く聞蓬萊方丈は仙の地也ま
のあたり士峰地を拂て蒼天をおさへ
日月のために雲門を開はかとむかふ
所皆衰にして美景千變す詩人も句を
盡さす才子文人も言を斷つ畫工も筆
をすてゝはしるもし藐姑射の巧の神
人有て其詩をよくせんか其畫を能せ
んか
雲霧の暫時百景をつくしけり
きり時雨富士をみぬ日ぞおもしろき
幻住庵にて

秋の山 旅痩や寝冷わづらふあきの山

秋の野 秋の野や草の中行風のおと

野分 猪もともに吹るゝ野分かな
ふき飛す石も淺間の野分かな

秋風 蜘何と音を何となく秋の風



秋風のやり戸の口やとがり聲
悼捨子
猿を聞人捨て子に秋の風いかに
義朝のこゝろに似たり秋の風
あき風や藪も畠も不破の關
身にしみて大根からし秋の風
一笑追善
塚もうごけ我泣聲は秋の風
途中
赤々と日はつれなくも秋のかぜ
那谷觀音にて
石山の石より白しあきの風
贈桃夭號
桃の木のその葉ちらすな秋の風
中村を過て
あきの風伊勢の墓原なほ凄し
秋のかぜ吹とも靑し栗の毬
坐右之銘
人の短を言事なかれ我長を說ことな
かれ
物いへは唇さむしあきのかぜ
暮秋のけしきを
秋かせや桐に動て蔦の霜
伊勢紀行之跋
西ひがしあはれさ同じ秋のかせ
悼松倉嵐蘭
秋かせにをれてかなしき桑の杖
野水が旅行を送る

見送りのうしろやさびし秋の風
鵜のはしの畑をさすらん秋の風
松植て竹のほしさよ秋のかぜ

名所八體のうち

八朔　八朔や天のはし立たばねのし

曲翠亭題夜寒

夜寒　乳麺の下たき立るよさむかな

六助六兵衛の二人にはせを庵を訪れて故郷の安否をきく

秋暮　いく千里隔つおもひや秋のくれ
雲の旅それらてはなし秋のくれ
愚案するに冥途もかくや秋の暮
あきの暮男は泣かぬものなればこそ

木因亭

死もせぬ旅寝の果よあきのくれ

深川の庵

棹郎の尻壁寒し秋のくれ
かれ枝に鴉のとまりけり秋のくれ

雲竹自畫像

こちら向け我も淋しき秋のくれ

所思

此道や行人なしにあきのくれ
あきのくれ客か亭主か中柱
塵土佐の腰張へけて秋のくれ
人聲やこの道かへる秋のくれ

三日月　三日月や朝顔の夕つぼむらん
三日月やはやてにさはる草の露

大曾根成就院より歸さに



何事の見立にも似ぬ三日の月

嵐蘭初七日詣墓

見しやその七日は墓の三日の月

下弦　二十日過出るや名殘三日の月

いさゝかなる所に旅立て舟の中に一夜を明し曉の空蓬より頂をさし出て

明行や二十七夜も三日の月

武藏守泰時仁愛を先とし政は慾を去を以て先とすとあり

名月　名月の出るや五十一個條
重々と名月の夜や茶臼山

敦賀夜泊

明月や北國日より定めなき
名月やふたつ有ても瀬田の月

衆題

夏かけて名月あつきすゞみかな
名月や湖水にうかぶ七小町
名月や兒達ならぶ堂のゑん
名月や鶴脛たかき遠干潟
名月やわれを筆架の影ほうし
名月や我家にもどる門徒坊

深川

名月や門にさし來る汐かしら

伊賀山中にて二句

名月の花かと見えて綿はたけ
名月に麓のきりや田のくもり
名月や池をめぐりてよもすがら
名月や西にもほしき窓ひとつ

等載に尋あひて
名月の見所とはんたひ寝せん
義仲寺にて
今日月　三井寺の門たゝかはやけふの月
木を伐てもと口見はやけふの月
月見　見るかけやまた行影も宵月よ
雲をり〳〵人を休る月見かな
座頭かと人に見られて月見かな
鹿島根本寺
寺にねてまこと顔なる月光かな
田家
賤の子や稲すりかけて月を見る
淺水の橋をわたる俗にあさうつといふ清少納言の橋はと有一條あさむつのと書る所とそ
朝むつや月見の旅の明はなれ
月見せよ玉江の芦をからぬ先
古寺觀月
月見する坐にうつくしき顔もなし
月見賦あり略す
米くるゝ友を今宵の月の客
十六夜　いさよひもまた更科の郡かな
打出の濱にて
十六夜や海老煮る程の宵の闇
堅田の十六夜
鎖明て月さし入よ浮御堂
やす〳〵と出ていさよふ月の雲
十六夜はわづかに闇のはじめかな



月を侘身をわひ拙きを侘てわふとこたへんとすれど問人もなし猶わひわびて
月　侘てすめ月侘齋が奈良茶歌
月ぞしるべこなたへ入らせ旅のやど
かつら男すますなりけり雨の月
影は天の下てるひめか月の顔
實や月間くち千金の通町
ながめるや江戸にはまれな山の月
廿日あまりの月かすかに山の端きはいとくらく駒の蹄もたと〳〵しくて落ぬへきことあまたたびなりけるに數里いまだ鶏鳴ならず杜牧が早行の殘夢に小夜の中山に到て驚く
馬に寝て殘夢月遠し茶のけぶり
神路山
三十日月なし千とせの杉を抱嵐
川舟やよい茶よい酒よい月夜
古將監が古實を語りて
月やその鉢の木の日の下おもて
鹿島にて
月早し梢は雨をもちながら
田家
草の葉や月待・里の燒はたけ
あの中に蒔繪書たし宿の月
姨捨山にて
おもかけや姨ひとり泣月の友
善光寺

月かけや四門四宗も只ひとつ

湯の尾

月に名をつゝみかねてやいもの神

燧山

義仲の寢ざめの山か月悲し

元祿二年つるかの湊に月を見て氣比の明神に詣遊行上人の古例をきく

月清し遊行のもてる砂の上

濱

月のみか雨に角力もなかりけり

中秋の夜敦賀にとまりぬあるじの物かたりにこの海に鐘のしつみて侍るを國の守のあまを入て尋させ給へど龍頭下さまに落て引あけへき便もなしときゝて

月いつこ鐘はしつめる海の底

斜橫亭

戸をひらけは西に山有伊吹と言花にもよらす雪にもよらす只孤山の德あり

そのまゝに月もたのまし伊吹山

伊勢國又玄の宅にとゝめられ侍る頃其妻男の心にひとしく物ことまめやかに見えけれは旅のこゝろを安くし侍りぬかの日向守の妻髪を切て席をまうけし心を今更申出て

月さびよ明智かつまの咄しせん

悼遠流天容法印



其靈を羽黑にかへせ法の月

わが宿は四角な影を窓の月

正秀亭初會

月代や膝に手を置宵の宿

消息

水あぶらなくて寢る夜や窓の月

柴の庵と聞はいやしき名なれども世にこのもしき物にぞ有ける東山に住ける僧を尋て西行のよませ給ふよし山家集にのせられたりいかなる住居にやとまづ其坊のなつかしければ

柴の戸の月やそのまゝあみだ坊

旅窓長夜

九度起ても月の七つかな

柱は杉風枳風が情を削住ひは曾良岱水が物すきを侘猶名月のよそほひには芭蕉五もとを栽たり

はせを葉を柱にかけん庵の月

深川の末五本松と言所に舟をさして

川上とこの川下や月の友

東順老人潮上に生れて東野に終をとれり

入月のあとは机の四隅かな

蓑蟲庵にて

今宵たれ吉野の月も十六里

畦山亭題月下送兒

月すむや狐怖かる兒のとも

其柳亭にて

秋もはやはらつく雨に月の形
山寒し心の底や水のつき
武藏野の月の若ばえや松島種
汐やかぬ須磨よ此湖秋の月
生玉邊より日なくらして
宵月夜　菊に出て奈良と浪花は宵月夜
見る影やまた片なりも宵月夜
仲秋の月は更科のさと姨すて山に慰
めかねて猶あはれさの目にも離すな
がら長月十三夜になりぬ
後の月　木曾の痩もまだなほらぬに後の月
石山に詣ける道
名殘月　橋桁のしのふは月の名殘かな
行秋　行秋や身に引まとふ三布ふとん

蛤のふた見にわかれゆく秋ぞ
行秋の猶たのもしや青みかん
ゆく秋や手をひろげたる栗の毬
淸水の茶店に遊ふ
暮秋　松かせの軒をめぐりて秋くれぬ
懐老杜
風髭を吹てくれ秋歎するは誰か子ぞ

## 草木

柳陰軒にて
散柳　散やなぎあるじも我も鐘を聞
全昌寺にて
庭掃て出るや寺にちるやなぎ
水淸くなりてやなぎのちる日かな



木槿　花木槿はだか童のかざしかな
嵩上吟
道はたの木槿は馬に喰れけり
桐一葉　よろへはいつ一葉に蟲の旅寢して
嵐雪におくる
さびしさを問てくれぬか桐一葉
當麻寺にて
朝顏　僧朝顏いく死かへる法の松
朝かほの花に鳴行蚊のよはり
和其角蓼螢句
あさ顏に我はめし食男かな
嵐雪が畫に讃のぞみければ
朝顏は下手の書さへ哀なり
人々郊外に送り出て三盆を修し侍る
に
あさがほは酒もりしらぬ盛かな
閉關
朝顏やひるは鎖おろす門の垣
あさ顏やこれも又我友ならす
蘭　有蘭草菊宜山
敦賀守榮院
門に入は蘇鐵に蘭の匂かな
悅堂和尚の隱室に招れて
香を殘す蘭帳蘭のやどりかな
茶店にて
蘭の香や蝶のつばさに薰物す
秋海棠　秋海棠西瓜の色に咲にけり
女郎花　玉川の水におぼれそ女郎花

ひよろ／＼と猶露けしやをみなへし

瓢の銘

米のなき時は瓢そをみなへし

畫讃

芭蕉　鶴鳴やその聲にばせを破ぬべし

茅舎の感

ばせを野分して盥に雨を聞夜かな

此寺は庭一はいのばせをかな

荻　荻の聲こや秋風の口うつし

萩　寢たる萩や容顔無禮花の顔

はぎ原や一夜はやとせ山の犬

ひとつ家に遊女も寢たり萩の月

觀水亭

ぬれて行人もおかしや雨の萩

種の濱

浪の間や小貝にまじる萩のちり

いろの濱

小萩ちれますほの小貝小さかづき

畫讃

しら露をこぼさぬ萩のうねりかな

藤堂玄虎子の庭なかは作りしを見て

風色やしどろに植し庭の萩

壽海長老我草の戸にして身まかり侍るを葬りて

芒　何事もまねき果たるすゝきかな

角觝草　道ほそし角力草の花の露

閑人の茅舍を訪て

蔦　つたうゑて竹四五本のあらしかな



野の宮の鳥居につたもなかりけり

桟や命をからむつたかつら

鬼灯　ほゝつきは實も葉もからももみぢかな

高田醫師細川青庵にて

草花　藥園のいづれの花を草まくら

草いろ／＼おの／＼花のてがらかな

仲秋中の一日此所に遊ふ青瓢の題を得て

瓢　夕がほや秋はいろ／＼の瓢かな

よし野にて

忍　御廟年を經てしのぶは何を忍草

蔦紅葉　つたの葉は昔めきたる紅葉かな

かやぶきの鄰ありけりつた紅葉

紅葉　いろつくや豆腐に落てうす紅葉

百景や杉の木の間のいろみ草

文ならぬいろはもかきて火中かな

蔵戸の人々に對す

番椒　草の戸を知れや穂蓼に唐がらし

かくさぬに宿は菜汁に唐がらし

大かせのあしたも赤し唐がらし

青てもあるべきものを唐がらし

千里の舊里にて

綿　わた弓や琵琶になぐさむ竹の奥

名月の花かと見えて綿はたけ

故人に逢て

冬瓜　冬瓜や互にかはる顔の形

悼仙風

芋　手向けりいもは蓮に似たるとて

西行谷

いも洗ふ女西行ならば哥よまん

芋の葉や月待つ星のやけ畠

遊女の畫讃

芙蓉　枝ふりの日に〳〵かはる芙蓉かな

きり雨のそらをふようの天氣かな

雁來紅　けいとうや雁の來時尙あかし

芦　とらへたき蹵ばかり見るあし間かな

蜀黍　たうきびや軒端の荻のとりちがへ

杉の竹葉軒と云庵を尋て

粟　粟稗にまつしくもあらず草の庵

知足が弟金右衞門が新宅を賀す

よき家や雀よろこぶ背戸の粟

伊勢の斗從に山家を訪れて

蕎麥花　蕎麥はまた花にもてなす山路かな

三日月の地はおほろなりそばの花

初茸　はつたけやまた日數經ぬ秋の露

松茸　松たけやかふれたほどの松の形

まつたけやしらぬ木の葉のへばり付

茸狩　茸かりやあぶない事に夕しぐれ

加賀の國に入

早稻　早稻の香や分入右は有磯海

落穂　いたゞひておちほひろはん關の前

重陽

菊　盃の下行きくや朽木盆

秋を經て蝶もなめるや菊の露

蓮池の主翁またきくを愛すきのふは

龍山の宴をひらきけふは其酒の餘れ



るをすゝめて狂吟たはむれとなす猶

思ふ明年誰かすみやかならん事を

いさよひのいつれか今朝にのこる菊

左柳亭にて

はやくさけ九日もちかし宿の菊

草庵の雨

起あがる菊ほのか也水のあと

北海の磯つたひして加州山中涌湯に

浴す里人の曰此所は扶桑三名湯の其

一なりとまことに浴る事しは〳〵な

れは皮肉うるほひ筋骨に通りて心神

ゆるく偏に顏色をとゞむる心ちす彼

の桃源も舟をうしなひ慈童の菊の枝

折もしらぬ

山中やきくは手折らも湯は匂ひ

木因亭

隱家や月と菊とに田三反

如行亭

痩ながらわりなき菊のつほみかな

田家にやどる

稻こきの姥もめでたしきくの花

堅田の何かし木旣醫師の兄の亭に招

れしに自ら茶をたて酒をもてなされ

ける野菜八※の中菊鱠いと芳しけれ

ば

蝶も來て酢を吸菊のなますかな

九月九日乙州が一樽を携來りければ

草の戸や日くれてくれし菊の酒

見ところのあれや野分の後の菊

岱水亭にて

影待や菊の香のする豆腐串

八町堀にて

きくの花さくや石屋のいしの間

大門通を過るに

琴箱や古もの店の背戸の菊

園女亭

白きくの目に立てみる塵もなし

奈良にて

きくの香や奈良には古き佛達

菊の香や奈良はいく代の男ぶり

くらがり峠にて

菊の香にくらがりのぼる節句かな

菊花讃

折節は酢になるきくのさかなかな

元祿辛酉初冬九日素堂菊園の遊重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍ること其頃は花いまだめぐみもやらず菊花開時卽重陽と云ろ心により且展重陽のためしなきにしもあらねば猶秋菊を詠して人々をすゝめられける事になりぬ

きくのかや庭にきれたる履の底

堅田禪瑞寺にて

朝茶のむ僧しづかなりきくの花

恕水別莊

木の實　こもりゐて木の實草の實拾はや



榎の實　榎のみちる椋鳥の羽音や朝嵐

橡　木曾のとち浮世の人の土產かな

幻住庵にて李由去來の二人に

柿　萆藺と柿とうれしき草の庵

しふ柿や一口はくふ猿のつら

堅田森瀨可休亭

祖父と親その子の庭や柿みかん

片野望翠亭

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

零餘子　きくの露落てひろへはぬかごかな

生類

蟲　夜るひそかに蟲は月下の栗を穿つ

盆過て宵やみくらし蟲の聲

きりぎりす　しづかさや繪かゝる壁のきり〱す

床に來て鼾に入やきり〱す

朝な〱手習すゝむきり〱す

白髮ぬくまくらの下やきり〱す

さびしさや釘にかけたるきり〱す

加賀の小松といふ所太田の神社の實物として實宜が昔からくさの甲同じく錦のきれ有遠き事ながらまのあたりにおほへて

むさんやな甲の下のきり〱す

猪の床にもゐるやきり〱す

竈馬　海士の家は小ゑびにまじるいとゝかな

蜻蛉　蜻蛉やとりつきかねし草のうへ

草の扉に住わびて秋風の悲しけなる

夕くれ友とちの方へつかはしけり
蓑蟲　みの蟲の音を聞に來よ草の庵
田莊酒家
鶉　桐の木にうつら鳴なる塀の内
田中の法藏寺にあそびて
鳴　刈あとや早稲かた〳〵の鳴のこゑ
鹿　むさしのや一寸ほとなしかのこゑ
ひれふりて牡鹿もよるや牡鹿島
奈良にて
ひいと啼尻聲悲しよるの鹿
女夫鹿や毛に毛が揃うて毛むづかし
稲雀　稲すゝめ茶の木畑や逃ところ
渡鳥　目にかゝる雲やしはしのわたり鳥

四十雀　老の名のありともしらで四十から
堅田にて
雁　病雁の夜寒に落てたひねかな
鳥の文かた野の雁よ片便宜
あさ風や只白雲にかり一つ
雁のこゑ寝どころ廣うおほえけり
月の雁羽裏も見せて渡りけり
鰍　かゝりとに鰍や浪の下むせひ
紅葉鮒　是も又水生木やもみち鮒

# 衣食

よし野西行庵
硯洗　硯あらふ智惠は出たり苔清水
丸岡が天龍寺を出る時金澤の北枝と
わかれにのぞみて
扇置　もの書て扇ひきさく別かな
角觝　角髮や奥を出羽のすもふ取
むかし聞秩父殿さへすもふ取
許六が畫に
勝すもふいつも上手に米の食
駒迎　棧やまつおもひいづこまむかへ
砧　鉞立や肩に槌うつから衣
近江路を通り侍る頃日野の邊にて胡
麻といふものに上の衣をとられて
剝れたる身には砧のひゞきかな
よし野にて
きぬた打て我にきかせよや坊の妻
聲澄て北斗にひゞくきぬたかな

猿ひきはさるの小袖を砧かな
くすし何かしの像
薬掘　むら雨を背中におふて柴胡掘
人に米を貰ひて
稲刈　世の中はいねかる頃か草のいほ
住よしの市に立て
舛市　升買て分別かはる月見かな

# 祭祀

髑骨の讃
盆　夕風や盆挑灯も糊はなれ
甲戌の秋大津にはべりしをこのかみ
の許より消息せられければ舊里に歸
りて盆會を營とて

墓参　家は皆杖にしら髪のはか参

魂祭　蓮池や折らで其まゝ魂祭

加賀の國を通る

熊阪がゆかりやいつの魂まつり　　鳥部山

たままつりけふも燒場のけぶりかな

尼壽貞が身まかりけるを聞く

數ならぬ身とな思ひそ魂祭

稻の穗のつゆばかりなる魂祭

名所八幡のうち

八朔　八朔や天のはし立たはねのし

内宮は事收て外宮の遷宮を拜侍りて

御遷宮　尊さに皆おしあひぬ御遷宮

秋雜

見渡は詠れば見れば須磨の秋

雨の日や世間の秋を堺町

後家の秋ものゝあはれを留めけり

深川の庵を旅立とて

秋十とせ却て江戸をさす故鄕

鹿島神前

この松の實生せし代や神の秋

田家

かりかけし田面の鶴や里の秋

留別

送られつおくりつ果は木曾の秋

さらでさへ秋よ野守のひとつ鐘



ある草庵にいざなはれて

秋凉し手毎にむけや瓜茄子

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

種の濱にて

さひしさや須磨にかちたる濱の秋

胡蝶にもならで秋ふる菜蟲かな

小名木澤桐奚興行

秋にそふて行はや末は小松川

あるじ夜遊ふ事を好て朝寢せらるゝ人也宵寢はいやしく朝起はせはし

おもしろき秋の朝寢は亭主ふり

いく秋のせまりて罌子にかくれけり

庵にかけんとて勾空が書せたる象好の繪に

あきの色ぬか味噌壺もなかりけり

何くふて小家はあきの柳かな

旅情

この秋は何て年よる雲に鳥

芝柏亭

秋ふかき鄰は何をする人ぞ

# 冬

## 乾坤

小春　月の鏡小はるに見るや目の正月

人の許へ初て行て

時雨　はつしぐれ初の字を我時雨かな

はやこなたへといふ露のむくらの宿

一はうれたくとも袖をかたしきておとまりあれや旅人

旅人と我名よばれん初しぐれ

伊賀の山中

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

許六亭にて

けふばかり人も年よれ初しぐれ

はつ時雨しづかに渡れ桂川

渡しよぶ人は我なりはつしぐれ

むらしぐれてれふれ町の名なるべし

行雲や犬の逃ほへむら時雨

いづく時雨傘を手にさげて歸る僧

火吹竹音やしぐれて小豆めし

戸田權太夫亭にて

一しぐれ礫や降て小石川

道のほとりにて時雨に逢て

笠もなき我はしぐるゝかこは何と

桐葉のぬし志淺からざりければしばらくとゞまらんとせしほどに

此海に草鞋すてん笠しぐれ

草枕犬もしぐるゝか夜のこゑ



しぐるゝや舟の帆づなに取つきて

鷄の聲にしぐるゝ牛屋かな

一尾根はしぐるゝ雲か富士の雪

美濃垂井宿矩外がもとに冬ごもりして

作り木の庭をいさめる時雨かな

舊里の道すがら

しぐるゝや田のあら株の黒む程

島田驛塚本が家に至て

宿かして名をなのらする時雨かな

馬士はしらし時雨の大井川

新わらの出そめて早きしぐれかな

山城へ井出の駕かるしぐれかな

草庵

人々をしぐれよ宿はさむくとも

冬の空　わがために日はうらゝなり冬の空

笠は長途の雨にほころび紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり侘つくしたるわび人我さへあはれに覺けるむかし狂歌の才士此國にたどりし事を不圖おもひ出てまうし侍る

木枯　(狂句)木がらしの身は竹齋に似たるかな

竹の畫讃

こがらしや竹にかくれてしづまりぬ

木枯や頰はれ痛む人のかほ

三河新城の家士菅沼權右衛門宅

京に倦て此こがらしやふゆ住居

鳳來寺に參籠して

## 霜

こがらしに岩吹とがる杉間かな
初しもや菊冷そめる腰の綿
我草の戸の初雪見んと參詣にありても いそぎ歸る事あまたゝひなりけるに師走八日はじめて雪ふりけるよろこび
はつ雪や幸庵にまかりある

## 雪

奈良大佛再興
はつ雪やいつ大佛のはしら立
はつ雪や聖小僧の笈のいろ
深川大橋半かゝりける時
はつ雪や掛かゝりたる橋のうへ
初雪や水仙の葉のたわむまで
山中に子供とあそびて
初雪に兎の皮の髭つくれ
時雨をやもどかしがりて松の雪
耕月亭
雪をまつ上戸の顔やいな光り
あられ交る帷子雪は小紋かな
里森を何といふともけさのゆき
子におくれたる人のもとに
しほれふすや世はさかさまの雪の竹
笠の緒や咽喰しめる富士の雪
雪の日や羅紗の羽織にたゝき綿
浪の花と雪もや水にかへり花
けさの雪根深を園の栞かな
ゆきの竹笛作るへうふしあらん
雪の朝ひとり干鮭を嚙得たり



湖水から光出しけり比良の雪
抱月亭
市人にいで是うらん雪のかさ
杜國亭にて中あしき人の事などとりつくろひて
雪とゆきこよひ師走の明月か
箱根越人もあるらし今朝の雪
旅人を見る
馬をさへながむる雪のあしたかな
寒山自畫讃
庭掃て雪をわするゝ箒かな
閑居箴ありはふく
酒のめばいとゞ寢られぬ夜の雪
鳴海驛奘言亭にて
京まではまだ半空や雪の雲
熱田御修覆
磨なほす鏡も淸しゆきの花
信濃路を過る
雪ちるや穗屋の薄の刈のこし
おのが音に誰人となん世にさたせられて老の後志賀の里にかくれ侍しとなり今大津松本あたり智月といふ老尼の許に尋て斯ることなど語出けるついでおもしろけれは
少將の尼の咄しや志賀の雪
湖水眺望
比良三上雪さしわたせ鷺の橋
大雪や婆々ひとり住藪の家

日頃にくむ鴉も雪のあしたかな

小町の畫讃

貴さや雪ふらぬ日もみのと笠

草庵に士あり

木枕のあぶら拭やよるの雪

雪ごとに梁たはむ住居かな

竹の讃

たはみては雪待竹のけしきかな

雪花は南の枝や遲ざくら

さそへ雲白衣の天狗比良の雪

つもれ／＼とく起て見ん夜の雪

雪白しいかさま三穂の冬なれや

雪見

夜著は重し呉天に雪をみるあらん

去年のわび寢をおもひ出て越人におくる

二人見し雪は今年も降けるか

いざゝらばゆき見にころぶ所まで

ぬれ蓑を手柄にしたる雪見かな

庵にうつりて

雪囲

深川や根こしの芭蕉雪かこひ

曾良何かしは此あたり近くかりに居をしめて朝なゆふなに訪つとはる我喰ものいとなむ時は柴折くぶる助となり茶を煮る夜は來て軒をたゝく性隱閑を好む人にてましはりこがねをたつある夜雪に訪れて

雪丸け

君火をたけよき物見せん雪丸け

深川冬夜の感



氷

櫓の聲浪を打て腸氷る夜や涙

茅舍買水

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり

あまつ縄手にて

進み行や馬上に氷る影法師

瓶われる夜の氷の寢ざめかな

冬枯

ふゆがれや世は一色に風の音

冬がれの磯にけさ見るとさかかな

穭田

穭田に霜の花見るあしたかな

枯野

馬ほく／＼我を繪に見る枯野かな

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

みちのくの名取の内猫山

山眠

山は猫眠りはいてや雪のひま

霜

貧山の釜霜に鳴聲寒し

しもかれに咲は辛氣の花野かな

から／＼と折ふし凄し竹の霜

古屋四友子を送て鎌倉までまかる

霜を踏てびつこひくまで送りけり

かりて寢ん案山子の袖や夜半の霜

夜すがらや竹氷らするけさの霜

逢杜國二句のうち

さればこそあれたきまゝの霜の宿

葛の葉の表見せけりけさの霜

病中

くすりのむさらでも霜の枕かな

深川大橋成就せし時

有がたやいたゞいて踏む橋のしも

あてもなくうつや霜夜のそらぎぬた

せきれいの足もとかろし橋の霜

### 霰

いさ子供はしりあるかん玉あられ
石山のいしにたばしるあられかな

自畫自讃
いかめしき音や霰の檜笠

與或人
冬しらぬ宿や籾する音あられ

如行亭にて
琵琶行の夜や三絃のおと霰

再芭蕉庵を造いとなみて
あられ聞や此身のもとの古柏
いさみ立鷹引すゆるあられかな
雜水に琵琶きく軒のあられかな
柊の葉にはねかへる霰かな

### 寒さ

池下の茶店にて
松葉をたいて手拭あぶる寒さかな

越人と吉田驛にて
さむけれどふたり旅寢ぞたのもしき

元起和尚より酒を給はりけるかへし
奉りける
水寒く寢入かねたる鷗かな
綿弓や窓に入日の影さむき
鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店

仙化が父の追善
袖の色よごれて寒し濃ねずみ
葱白く洗たてたる寒さかな
蠟燭にかほのてらつく寒さかな
山寒し心の底や水の月



芳野まで行かずにかへる寒さかな
寒き夜に不破の關守る人はたそ

### 師走

月白し師走は子路が寢覺かな

十二月九日一井亭
旅寢よし宿は師走の夕月夜

五百丸へ元服の祝として
春や立また春を見ん此師走
何に此師走の市に行鴉
かくれけり師走の海のかいつぶり

### 寒

から鮭も空也の痩も寒の中
月花の愚に鍼立ん寒の入
雁さわぐ鳥羽の田面や寒の雨

### 年暮

なりにけり／＼まで年のくれ
わすれ草菜飯につまん年のくれ
みな拜め二見の注連を年のくれ
乞てくらひもらふてくらひたよりに
年のくれければ
めでたき人の數にも入ん老の暮
月雪とのさばりけらし年のくれ

代々の賢き人々も古郷はわすれがたきものにおもほへ侍るよし我今は初めの老も四とせ過て何事につけてもむかしのなつかしきまゝにはらからのあまたよはひかたぶきて侍るも見すてがたくて初冬の空のうちしぐるゝ頃より雪をかさね霜を經て師走の末伊陽の山中に到なほ父母のいまそかりせばと慈愛のむかしも悲しく思

ふ事のみあまたありて

古郷や臍の緒に泣年のくれ

盗人に逢た夜もあり年のくれ

蛤の生ける甲斐あれ年のくれ

分別の底たゝきけり年のくれ

舊讃

行年　ゆく年や汝が親の小松うり

行年や薬に見たき梅の花

年波　年波や蜑があまたの伊勢參り

## 草木

月の澤と聞へける明照寺に旅の心を澄して

散紅葉　尊かる涙や染てちるもみぢ

當寺この平田に地をうつされて既に百年に及ぶとかや御堂奉加のことばに日竹樹ひそかに玉石老たりとまことに木たちものふりて殊勝におほへ侍りければ

落葉　百年のけしきを庭の落葉かな

多度の權現を過る

宮人よ我名をちらせ落葉川

大津を過る

木の葉　三尺の山もあらしの木の葉かな

九とせの春秋市中に住はひて居を深川の邊りにうつす長安は古來名利の地空手にして金なきものは行路かたしと云けん人のかしこく覺侍るはこ



の身のともしきゆゑにや

草の戸に茶を木の葉かくあらしかな

耕雪亭別莊にて

返花　こがらしににほひやつけし返り花

逢杜國二句のうち

麥蒔　麥生てよきかくれ家や畑むら

蕎麥刈　刈あとやものにまぎれぬそばの莖

消息

大根　三十里尾張大根のはなしかな

菊の後大根の外さらになし

消息

口上に書落しけり土大根

大根引といふ事を

鞍壺に小坊主乘や大根引

玄虎子旅館にて菜根を喫て終日大夫に談話す

もの丶ふの大根からきはなしかな

霜の後葎をとひて

枯草　花皆かれてあはれをこぼす草の種

熱田にて

枯葱　しのぶさへかれて餅かふやどりかな

三秋を經て深川の草庵に歸ければ舊友門人日々に聚來ていかにと問はこたへ侍る

枯尾花　ともかくもなくてや雪の枯尾花

桑名古益亭にて

冬牡丹　冬ぼたん千鳥よ雪のほとゝぎす

熱田梅人亭塵裏の閑をおもひよせて

水仙　水仙や白き障子の友うつり

三河にて白雪といへる者の子二人へ

桃先桃後の名をあたへ

その匂ひ桃より白し水仙花

寒菊　寒ぎくや粉糠のかゝる臼の端

此里をほひといふ事はむかし院の御

門の譽させ給ふなるによりてほう美

といふよし里人の語り侍るをいづれ

の文にかきとゞめたるとも知らす侍

れ共いともかしこく覺へ侍るまゝに

早咲梅　椿はや咲そめんほみの里

防川亭にて

探梅　香を探る梅に藏見る軒はかな

うちよりて花入さぐれ梅つばき

## 生類

乾鮭　から鮭や何かし殿は毛唐人

河豚　あらなにともなや昨日は過て河豚汁

ふく汁や鯛も有のに無分別

ある家に古き奴僕有てかたく禦のをし

しへを守る

兄弟のくすしにくむやふくと汁

桑名にあそんで熱田に至る

あそび來ぬふくつり乘て七里迄

生海鼠　生ながらひとつに氷るなまこかな

尾張の國熱田にまかりけるころ人々

師走の海を見んとて舟さし出て

鴨　海暮てかもの聲ほのかに白し



龍安寺にて

山鳥よ我もかも寢ん宵まとひ

けごろもにつゝみてぬくし鴨の足

千鳥　一びきのはね馬もなし川千どり

ねざめは松風の里　呼續は夜明てか

ら　笠寺は　雪降日

星崎の闇を見よとや鳴千どり

杜國を訪ける道すがら

鷹　鷹一つ見付てうれしいらこ崎

杜國が不幸を伊良古崎に尋て鷹の聲

を折ふしきゝて

夢よりもうつゝの鷹ぞたのもしき

## 衣食

冬籠　ふゆ籠りまた寄そはん此はしら

金屏の松の古ひやふゆごもり

贈洒堂　湖水の礒を這出たる田螺一

匹　蘆間の蟹のはさみをおそれよ牛に

も馬にもふまるゝ事なかれ

難波津や田にしのふたの冬籠

權七に示す　舊里を去て晉田野に身

をさすらふ人有家僕何某水木のため

に身を苦しめ心をいたましめてその

僕奴何段か功を爭ひ陶侃が故奴をし

たふ誠や道は其人をとるべからずも

のは其形にあらず下位に在ても上智

の人有と云り猶石心鐵肝たゆむ事勿

れ主も其善をわするべからず

先祝へ梅をこゝろの冬ごもり
千川亭に遊て
折々に伊吹を見てや冬ごもり
後の世は如何なるらん冬ごもり
爐開　爐開や左官老行鬢の霜
支梁亭にて
口切　口きりに堺の庭ぞなつかしき
火燵　きり〲すわすれ音に鳴こたつかな
住つかぬ旅のこゝろや置こたつ
硯このむ奈良の法師かこたつかな
圍爐裏　五つ六つ茶の子にならふゐろりかな
火鉢　深草やこれも淺草火ばちかな
火桶　あらがねの土よりおこる火桶かな
古き代をしのびて

霜の後撫子咲る火桶かな
炭　小野炭や手習ふ人の灰せゝり
白すみやかの浦しまが老のはこ
消し炭に薪わる音か小野の奥
少年をうしなへる人に對
埋火　埋火もきゆや涙の烹へる音
曲翠旅館
埋火や壁には客の影ほうし
貞德翁の讃
頭巾　稚名やしらぬ翁のまる頭巾
深川
米買に雪の袋やなげ頭巾
頭巾著た額さし込や繩すだれ
我黒髮なでつけにして頭巾かな



紙衣　かみこにも霜や置かと撫てみし
ためつけて雪見にまかる紙衣かな
李下か妻の悼
蒲團　かつぎふすふとんや寒き夜凄き
畫讃
衾　たのむぞよ寢酒なき夜の紙衾
霰酒　千代をふる天のてんつるあられ酒
節季候　節季候の來たれば風雅も師走かな
素堂亭年忘
節季候を雀の笑ふ出立かな
煤掃を祝はふて
煤掃　すゝ掃や暮行宿の高鼾
旅ねして見しや浮世のすゝ掃
旅行

すゝ掃は杉の木間のあらしかな
行脚の五器一具難波に殘し置たるを
年經て路通がおくりけるを
是や世の煤に染らぬ古盒子
煤掃は己が棚つる大工かな
破れみのをかりて來たりな煤掃
煤はらひ牛のしらみの榎かな
餅搗　有明も三十日に近し餅の音
くれ〲て餅をこだまのわび寢かな
餅花　もち花やかざしにさせるよめが君
名所八體のうち
衣配　松島や雪のしら地の衣くばり
古暦　うか〲と年よる人や古ごよみ
年忘　年忘れ三人よつて喧嘩かな

洛の御靈別當景桃丸奥行
半日は神を友にや年わすれ
また埋火のきへやらず臘月末京都を
立出て乙州が新宅に春を待て
人に家を買せて我は年わすれ
魚鳥の心はしらずとしわすれ
この忘れながるゝ年の淀ならん
せつかれてとしわすれする機嫌かな
海ある所に東たる柴を思かきて
年取物　須磨の浦のとし取物や柴一把
年の市　一休が土器買んとしの市
としの市線香買に出はやな

## 祭祀

神の留主　留主の間にあれたる神の落葉かな
霜月のはじめ武江に至る
神の旅　都出て神も旅寢の日數かな
夷講　えびす講酢賣に袴著せにけり
ふり賣の雁あはれなりえびす講
御命講　菊鷄頭きりつくしけり御命講
消息
御命講や油のやうな酒五升
落柿舍に鉢敲を待て
鉢敲　長嘯か墳もめくるか鉢たゝき
納豆きる音しばしまてはち敲

## 冬雜

石かれて水しほめるや冬もなし



面白し雪にやならん冬の雨
さし籠る葎の友やふゆ菜賣
大通庵主道圓居士芳名を聞事親しきまゝに見えん事を契て終に其日を待ず初冬一夜の霜と消ぬ今日はや一めぐりにあたれりと云を聞て
其かたち見ばや枯木の杖の長
成庵にて
冬庭や月もいとなる蟲の吟
三河國鳳來寺に詣る道の邊りより例の病發りて麓の宿に一夜を明すとて
夜著ひとつ祈出して旅寢かな
夜著は重し呉天に雪を見るあらん
夜著に寢てかりがね寒し旅の宿
鹽にしていざことづてん都鳥

## 無季

歩行ならば杖つき阪を落馬かな
朝よさに誰松蔦ぞ片こゝろ
酒飲居たる人の畫に
月花もなくて酒飲むひとりかな
貞德宗鑑守武の畫像三翁は風雅の天工を受得て心匠を萬歲に傳此かげに遊んもの誰か俳道を仰がざらんや
月花の是やまことの主達
張笠說
世にふるもさらに宗祇のやどりかな
骨柴やかくと見るより蝶のから
かたられぬ湯殿にぬらす袂かな

# 芭蕉文集

## 十八樓記 元祿元年

美濃國ながら川にのぞみて水樓あり。主を賀島氏といふ。稻葉山後に高く、亂山左右にかさなりて近からず遠からず。田中の寺は杉の一むらにかくれ、岸にそふ民家は、竹のかこみのみどりも深し。瀑布所々に引はへて右に渡し船浮ぶ。里人行かひしげく漁村軒をならべて、網を引釣を垂るゝおのがさまざまも只此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日も忘るゝばかり、入日の影も月にかはりて波にむすぼるゝ篝火の影もやゝ近く、高欄のもとに鵜飼するなど、誠に目ざましき見もの成けらし。かの瀟湘の八のながめ西湖の十の境も、凉風一味のうちに思ひためたり。もし此樓に名をいはんとならば十八樓ともいはまほしき也。

此あたり目に見ゆるもの皆凉し

## 幻住庵記 元祿三年

石山のおく岩間のうしろに山あり國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡

りて、翠微に登る事三曲二百歩にして八幡宮立せ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌なる事を兩部光を和げ、利益の塵をおなじうしたまふも又たふとし。日頃は詣でざりければいとゞ神さび物しづかなる傍に住捨し草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根もり壁落て狐狸ふしどを得たり、幻住庵と云。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏、曲翠氏の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔に成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予また市中をさる事十年ばかりにして、五十年やゝちかき身は、簑虫の簑を失ひ蝸牛の家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高砂子あゆみ苦しき北海の荒磯にきびすを破りて、今年湖水の浪にたゞよふ鳰の浮巣の流とゞまるべき蘆の一もとのかげたのもしく軒端ふきあらため、垣根結そへなどして卯月の初いとかり初に入し山の、頓て出じとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名殘も遠からず、つゝじ咲殘り山藤、松に懸りて時鳥しば〱過る程、宿かし鳥の使りさへあるを、木啄のつゝくともいはじなど、そゞろに興してたましひ呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち人家よきほどに隔り、南薫峰よりおろし北風海を浸して凉し。日枝の山、比良の高根より辛崎の松は霞こめて、城あり橋あり釣たるゝ舟あり、笠取にかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる唄、螢飛かふ夕闇の空に水鶏叩く音、美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は士峰の俤にかよひて武蔵野の古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽千



丈か峯袴腰といふ山あり、黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん萬葉集の姿也けり。猶眺望くまなからんと、うしろの峰に這のぼり、松の棚作り、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名付く。彼海棠に巣をいとなひ主薄峰に庵を結べる王翁除佺が徒にはあらず。唯睡癖山民と成て、孱顏に足を投出し、空山に虱を捫て坐す。たま〱心まめなる時は谷の清水を汲て自炊ぐ。とく〱の雫を侘て一爐の備へいとかろし。はた昔住けん人の殊に心たかく住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て夜の物をおさむべき所などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧正は加茂の甲斐何某が嚴子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、或人をして額を乞。いとやすく〱と筆を染て、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝と云、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅簑ばかり枕の上の柱に懸たり。晝は稀々訪ふ人々に心を動かし、或は宮守の翁、里のをのこ共入來りていのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜坐靜に月を待ちては影を伴ひ、燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくといへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにはあらず。やゝ病身人に倦て世をいとひし人に似たり。倩年月の移りこし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせしも、たよりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のは

かりごとゝさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。樂天は五臟の神を破り老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならすやと、おもひ捨て臥ぬ。

先たのむ椎の木もあり夏木立

題芭蕉翁國分山幻住庵記之後

何世無隱士以心隱爲賢也何處無山川風景因人美也問讀芭蕉翁幻住庵乃記識其賢且知山川得其人而益美矣可謂人與山川共相得焉廼作鄙章一篇歌之曰

琵湖南兮國分嶺　古松鬱兮綠陰清
茅屋竹椽纔數間　內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川　風景依稀入誹城
此地自古富勝覽　今日因君倚益榮

元祿庚午仲秋日震軒具艸

## 幻住庵賦

五十年やゝちかき身は、苦桃の老木となりて、蝸牛のからをうしなひ、蓑虫のみのをはなれて、行方



なき風雲にさまよふ。かの宗鑑かはたごを朝夕になし、能因か頭陀の袋をさぐりて、松島白川に面を焦し、湯殿の御山に袂をぬらす。猶善知鳥啼く外の濱邊より、えぞが千島を見やらんまでと、しきりに思ひ立侍るを、同行曾良何某と云もの、多病いぶかしなど袖をひかへるに心たわみて、象潟と云所より越路の方へおもむく。さるは高砂子あゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破て、ことし湖水のほとりにたゞよふ鳰の浮巣のながれとゞまるべき蘆の一葉のやどり求るに、其名を幻住庵と云、其山を國分山といへり。古きみやしろのたゝせ給へば、六根おのづから潔して塵なき心地なんせらる。かの住捨し草の戸は勇士菅沼氏の曲水子の伯父なる人の此世をいとひし跡とかや。主は八とせばかりの昔になりて、棲はまほろしのちまたに殘せり。まことに知覺迷倒もみなたゞ幻の一字に歸して無常迅速のことわり、いさゝかもわするべき道にあらず。山はさすがに深からず、人家よきほどにへだゝり、石山を前にあてゝ岩間山のしりに立り。南薰高く峰よりおろし北風遙かに海をひたして凉し。折しも卯月の初めなれば、つゝじ咲殘り、山藤、松にかゝりて、時鳥しば〳〵過るほど宿かし鳥のたよりさへあるに、木啄のつゝくともいでじ、かつこ鳥我をさびしがらせよなどひとりよろこび、そゞろにたのしみて、呉楚東南のながめに耻ず。五湖三江もこゝにうたがはしきや。ひえの山比良の高根よりから崎の松はかすみこめて、膳所の城は木間にかゞやき、勢田の橋に雨はれて粟津の松原に夕日を殘す。三

上山は不二の俤にかよひて、むさし野の古きすみかも思ひ出られ、田上山に古人をしたふ。さゝほがだけ、千丈か峰はかまこしと云山あり。笠取山に笠はなくて、黒津の里人の色やくろかりけん。猶はた眺望くまなからんと、うしろの峰にはひのぼり、松の棚作り、藁の圓坐を敷て、これを猿の腰かけと名づく。傳へきゝぬ除老が海棠巣の飲樂も市にありてかまびすしく、王道人が主薄峯の住ひも、愛やかなる時は薪を拾ひ清水をむすぶに、齒朶一つ葉のみどりをつたふ、とく／＼の雫をわびては、一爐のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがに心高く、たくみおける物ずきもなし。持佛一面をへだてよるの物かくし置べき所などいさゝかしつらへり、さるを高良山の僧正、洛に上り居給ひしをある人をして額をこふ。いとやすらかに筆をとりて幻住庵の三字をおくらる。其裏には予が名を書て、後見ん人のかたみともなれりとなり。山居といひ、旅寝といひ、させる器たくはふべきにもあらず。木曾の檜笠、越の菅みのばかり枕の上の柱にかけたり。ひるは宮守の翁、麓の里人など入來りて猪の稲くひあらし兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬはなしに日を暮し、且はまれ／＼訪人も、夜坐しづかにして影をともなひ、罔兩に對しては是非をこらす。斯いへばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさんとにもあらず、病身やゝ人にうみて世をいとひし人に似たり。何ぞや法をも修せず俗をも



つとめず、いとわかき時よりよこさまにすける事侍りて、しばらく生涯のはかりごとゝさへなれば、終に此一筋につながれて、無能無才を恥るのみ。勞して功空しく神つかれ眉をしわめて秋も半に過行まゝ、風景朝暮の變化とても、又只幻の栖ならずやと、やがて此文をとゞめて立去ぬ。

註。此文前掲の幻住庵記と文章相似たるところあり。或はその草稿にはあらざるか。

## 芭蕉を移す詞　元祿五年

菊は東籬に榮え、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて、世塵にけがさる。荷葉は平地にたゝず、水清からざれば花さかず。いづれの年にやすみかを此境に移す時芭蕉一もとを植。風土芭蕉の心にや叶ひけん。數株莖を備へ、其葉茂り重りて庭をせばめ、萱が軒端もかくるゝ斗なり。人呼て草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、所々に送る事年々になん成りぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地を替てあたり近き人々に霜の覆ひ風のかこひなど、返す／＼頼み置て、はかなき筆のすさびにも書殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅宿のむねにたゝまり、人々のわかれ、芭蕉の餘波ひとかたならぬ侘しさも、終に三とせの春秋を過して、再び芭蕉に泪をそゝぐ。今年五月の半、花立花の匂ひもさすがに遠からざ

れば、人々の契も昔にかはらず。猶此邊り得立去らで、舊き庵もやゝ近う、三間の茅屋つきづきしう杉の柱いと淸げに削なし、竹の枝折戸安らかに葭垣厚うわたして南に向ひ池に臨みて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を進めてなゝめ也。浙江の潮三つまたの淀にたゝへて、月を見る便よろしければ、初月の夕より雲いとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて先芭蕉を移す。其葉廣うして琴をおほふに足れり。或は半吹をれて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。たまたま花咲けどもはなやかならず、莖太けれども斧にあたらず。かの山中不伐の類木にたぐへて其性よし。僧懷素は是に筆をはしらしめ、張橫渠は新葉を見て修學の力とせしと也。予其二つをとらず只此陰に遊びて、風雨に破れやすきを愛す。

## 成秀か庭上の松をほめる詞　元祿四年

松あり、高さ九尺ばかり、下枝さし出るもの一丈餘、枝上だんをかさね、其葉森々とこまやかな也。風、琴をあやとり雨を呼、波を起す。箏に似、笛に似、鼓に似て、浪は籟をとく。當時牡丹を愛する人奇出をあつめて他にほこり、菊を作れる人は小輪を咲せて人にあらそふ。柿木柑類は其實を見て枝葉のかたちをいはず。唯松ひとり霜後に秀、四時常盤にして、しかも其けしきをわかつ。樂天曰、松よく舊氣を吐く、故に千歳を經と。主人目をよろこばしめ心を慰するのみにあらず、長生保養の齡を知て松にちぎるなるべし。



## 月見賦

ことし琵琶湖の月見んとて暫く木曾寺に旅寢して、膳所松本の人々を催に、乙州は酒をたづさへて泉川に三日の名をつたへ、正秀は茶を包て信樂に一夜の夢を覺す。今宵は茶といひ酒といひかたふの人も二派にわかれて、洒堂は灯にかたぶきて、其茶に玉川か歌を詠じ、丈草は月にうそぶきて、其酒に樂天が詩を吟ず。支考は若く木節は老ぬ。智月は物の覺束なるかつぎのあまのなま浮びならず。それが中にも惟然法師は酒におどろき茶に感じ、ほひろもそしろも空に風吹て爰に三四者の志をためさらんや。まして其外の友とする人も峨々洋々の心ざしをしれゝば、凡て飮中八仙の遊びならん。誠やつれづれの法師たに心をつくろはぬ友ゑらびはかゝる月見の佗なるやと思ひしまゝの草の庵に浮世の外の風狂をつくせり。

米くるゝ友をこよひの月の客

かくて三盃の興に乘じて湖水の月に船を浮べんと物このむ人の風情をそへたるに、杖に瓢箪の唐子は

なけれ共扇に茶瓶の若男あれば、赤壁の船のとほしさにはあらざめり。さゝ浪や打出の濱の名にしおふ鏡の山もこなたにさし向ひ、日枝は横川の杉につらなりて比良の高根は雁をもかぞへつべし。うしろに音羽の峰高く、石山の鐘はあはづの嵐にさへて、そこに楓橋の霜も置ぬらん。矢橋の歸帆は今宵をもてなすに似たるべし。

名月や湖水に浮ぶ七小町

されば我朝の紫式部は石山に源氏の佛を寫し、唐國の蘇居士は西湖に越女の粧をたとふ。何れも風雅の名に殘りて今のまぼろしに浮はざらんや。實そも和漢の名蹤なりけらし。さて松本に船をさし寄て茶店の欄干に心をはなてば、月はよし蓬萊の水をへだて身はたゞ芙蓉の露にうるほふ。竹の林も時ならで松江の鱸は今宵なるをや。猶はたかたふく月の名殘には辛崎の松もひとりやたてる古き都の名もゆかしければ、尾花川の明ほのをこそと千那尙白をおどろかしぬれば、夜ははや五更に過ぬべし。

三井寺の門たゝかばやけふの月

誠に推敲の昔ながら船に今宵の遊を思へば、此座に韓愈の文章をもあざむき、賈島か詩賦をもゝときぬべき詩人文客にとほしからねば、たとへ赤壁の前後といふとも其地に此人をはづべきやと見ぬもろこしを相手にとりて、今宵の風流を爭ふ程に月は長等山の木の間に入ぬ。



## 既望賦 元祿三年

望月の殘興猶やまず今宵は二三子にいさめられて船を堅田の浦にはす。其日もたそがれの程ならん何某成秀といふ人の家の後に漕入れて、醉翁狂客の月にうかれて來れるありと船の中より聲々によばふ。あるじは思ひかけずおどろき悅びて、簾をまき塵を拂ふに、其後園に芋あり、さゝげありて、鯉鮒の切目たゝさぬにしもあらず。やがて岸上に榻をならべ筵をのべて各いざよひの宴を催す。月は待ほどもなくさし出て、湖上はなやかに照渡れり。兼て聞ぬ仲秋望の日は月の浮見堂にさし向ふを鏡山といふなるよし。今宵猶其あたり遠からじとかの堂上の欄干によれば三上水莖は左右にわかれて、その間に十二峰の影をひたす。とかくいふほど月も三竿にして黑雲のうちに隱れたれば、いづれか鏡山といふ事をわかず。されどあるじの興をそへてをり〳〵雲のかゝるこそと、客をもてなせる心ざしいと切なり。やがて其月の雲をはなるゝほど水面に玉塔の影をくだきてあらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひの容を世の中にかけて、かたぶく月のをしきのみかはとは、京極黄門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此堂に遊びて二たび惠心僧都の衣をうるほす。無常觀想の便ならずやといふに、あるじは興に乘じて來れる客をなど、さは興つきて歸さんやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかた

ぶきて姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

鎖あけて月さし入よ浮御堂

やすやすと出ていざよふ月の雲

## 伊賀國新大佛之記 元祿元年

伊賀國阿波の莊に新大佛といふあり。此所は南都東大寺の聖俊乘上人の舊跡也。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七宗無ひとり二人誘ひ合してかの地に至る。仁王門鐘樓の跡は、枯たる草の底に隱れて松物いはゞこと問はん礎ばかり菫のみしてといひけんもかゝる氣色に似たらん。猶分入て蓮花臺獅子の座なんどはいまだ苔の跡を殘せり。御佛は後へなる岩窟にたゝまれて、霜に朽、苔に埋れてわづかに見えさせ給ふに、御ぐし斗はいまだつゝがもなく、上人の御影を崇め置たる草堂の傍に安置したり。誠にこゝらの人の力を費し、上人の貴願いたづらになり侍ることも悲しく、涙も落て語もなく、むなしき石臺にぬかづきて、

丈六にかげろふ高し石の上



## 紙衾記 元祿二年

古き枕古きふすまは貴妃がかたみより傳へて戀といひ哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には、鴛鴦をぬひ物にして、二つのつばさに後の世をかこつ。彼は其膚に近く其句ひ殘りとゞまられんをや。戀の一物とせんむべなりけらし。いでや此紙のふすまは戀にもあらず、無常にもあらず。蜑の苫屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせきを思ひて、出羽の國最上といふ所にて、人つくり得させたる也　越路の浦々、山館野亭の枕の上には、二千里の外の月を宿し、蓬葎の敷寢の下には霜にさ席のきりぎりすを聞て、晝は疊みて脊中に負、三百餘里の險難を渡り、終に頭を白くしてみのゝ國大垣の府にいたる。猶も心のわびをつきて貧者の情をやぶる事勿れと、我なしたふものにうちくれぬ。

## 洒落堂記 元祿三年

山は靜にして性をやしなひ、水は動いて情を慰む。靜動二つの間にして栖を得る物あり。濱田氏珍夕といへり。目に佳境を疊にし、口に風雅を唱へて濁をすまし塵をあらふが故に洒落堂といふ。門に戒幡を掛て分別の門内に入る事をゆるさずと書けり。かの宗鑑が客にをしふるざれ歌に一等くはへてを

かし。且それ簡にして方丈なるもの二間休紹二子の佗を次てしかも其のりを見ず。木を植、石をならべてかりのたはふれとなす。抑おもの丶浦は、勢多唐崎を左右の袖のごとくして、湖を抱て三上山に向ふ。湖は琵琶のかたちに似たれば松のひゞき波をしらぶ。日枝の山比良の高根をな丶めに見て音羽石山を肩のあたりになむ置けり。長等の花を髪にかざして、鏡山は月を粧ふ。淡粧濃抹の日々にかはれるがごとし。心匠の風雲も亦是に習ふ成べし。

四方より花吹入てにほの海

## 柴門辭 元祿六年

去年の秋かりそめに面をあはせことし五月の初、深切に別ををしむ。其わかれにのぞみて一たび草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其器繪を好み風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。繪は何の爲に好むや。風雅の爲に好むといへり。風雅は何の爲愛すや。繪の爲愛すといへり。其學ぶ事二にして、用をなす事一也。まことや君子は多能を耻と云へれば品二にし用一なる事感ずべきにや。繪はとつて予が師とし風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が繪は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。只釋阿西行の



詞のみ假初にいひちらされしあたなるたはふれごともあはれなる處おほし。後鳥羽上皇の書せ給ひしものにもこれらは歌に實有て、しかもかなしびをそふるとのたまひ侍しとかや。されば此御ことばを力として其細き一筋をたどり失ふ事勿れ。猶古人の跡を求めず。古人の求めたる所を求めよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又是に同じと云て燈をかゝげて柴門の外に送りてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末　　風羅坊芭蕉述

おなじく五月六日の頃旅立んと申遣しけるにおどろき、例の次郎兵衛を使として、後の旅は我も木曾路を經て眞一文字に五老井と志す。彦城の諸子に早く對面せん事を常々ねがふ、かならず人に沙汰する事なかれと、こまやかに文して色紙短冊繪讃の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずとて發句なといとねんごろにしたゝめ、かさねて詞書をそへて、うまのはなむけを寄られたり。並に杉風子各餞別有。

## 送許六辭 元祿六年

木曾路を經て舊里にかへる人は森川氏許六と云。古より風雅に情ある人々は後に笈をかけ草鞋に足をいため破笠に霜露をいとひて、おのれが心をせめて物の實をしる事をよろこべり。今仕官おほやけの

脇には長劔を腰にはさみ、乘かけの後に槍をもたせ歩行若黨の黑き羽織のもすそは風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅

うき人の旅にも習へ木曾の蠅

兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後のかたみに二句ながらならべ侍ると云々

## 送僧專吟詞　元祿六年

杖頭に草鞋をかけて笠の内に名をあらはす。元祿六とせ彌生のはじめ僧專吟武江の東深川の草扉を開て、既に一歩をはじむと書ぬ。此僧常に風雅を好み市を避て年々斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣んとて、身は雲外の鶴にひとしく、流に觜をすゝぎ、千尋の園に翅をふるふて、野にふし雲に泊らん胸中の塵いさぎよし。予、莽の交をなす事久し。今此別にのぞみてともに岸上に立て、箱根山はるかに見やる。かの白雲のたわめる所こそ旅愁の嶮難さかしきちまたなるべけれ。君かならず首をめぐらして見よ、我又此岸上に立んといひて袂を分ちぬ。

鶴の毛の黑き衣や花の雲



## 更科姥捨月之辨　元祿元年

あるひばしらゝ吹上ときくにうちさそはれてことし姨捨の月見ん事しきりなりければ、八月十一日みのゝ國を立道とほく日數すくなければ、夜に出、暮に草枕す。思ふにたがはず、其夜更科の里にいたる。山は八幡といふ里より一里斗南に、西南に横をりふしてすさまじう高くもあらず。かど〳〵しき岩なども見えず、たゞ哀ふかき山のすがた也。なぐさめかねつといひけんもことわり知られて、そゞろに悲しきに何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いとゞ涙も落そひければ、

俤や姨ひとり泣月の友

いざよひもまた更科の郡かな

## 栖去之辨　元祿五年

こゝかしこうかれありきて橘町と云所に冬籠して、睦月きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして口をとぢんとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。家を放下して栖を去腰にたゞ百錢をたくはへて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たる風情終に菰をかぶらんとは。

雲雀より空にやすらふ峠かな

## 煤掃之說

明ほの空より物のはた〳〵と聞るは、疊を叩く音なるべし。今日は師走の十三日煤掃のことぶきなり。けにや雲井の儀式。九重の町の作法は嘉例ある事にして、只なみ〳〵の人の煤はく儲こそいと面白けれ。各門さしこめて奥のひとまを屛風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて嫗が帷子の上張爪さき見えたる足袋もいと寒く、冬の日影のはやく晝に成行、庭の隅調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるこそ目には立なれ。家童の綠の破れ簀の子の下を覗き廻るは何を拾ふにやとあやし。味噌と呼る大男の袋かぶり簑きたるもめづらかに、米櫃のサン打つけ爼板しらけ行燈張かへて、たつくり鱠淺漬のかをり花やかに、かみしもの膳すゑならべたるに、程なく暮て高鼾とはなりぬ。

煤掃や暮行宿の高いびき

## 閉關之說 元祿五年

色は君子の惡む所にして佛も五戒のはじめにおくといへども、流石に捨がたき情のあやにくに、哀な



るかた〳〵も多かるべし。人知れぬくらぶの山の梅の下ふしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關も守る人なくば、いかなるあやまちをか仕出てん。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身を失ふためしも多かれど、老の身の行末をむさぶり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十餘年也。初めの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起したる寢覺の分別何事をかむさぶる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱增長して一藝すぐるゝものは是非のすぐるゝもの也。是をもて世のいとなみに當て、貪慾の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて、生かす事能はずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならんこそ老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辨あり。出ては他の家業をさまたぐるもうし。孫敬が戸を閉て杜五郎が門を鎖さんには友なきを友とし、貧きを富りとして五十年の頑夫、自書みづから禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣

## あら野集序 元祿元年

尾陽蓬左橿木堂主人荷兮子集を編て名をあら野と云。何故にこの名ある事をしらず。予はるかに思ひやるにひとゝせ此郷に旅寢せしをり〳〵の言捨あつめて冬の日といふ。其日影相續て春の日又世にかゞやかす。げにや衣更著やよひのけしき、柳櫻の錦を爭ひ、蝶鳥のおのがさま〴〵なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものもあればにや。糸遊のいとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりてひめ百合のなにゝもつかず、雲雀の大空にはなれて無景の極りもなき道芝のみちしるべせんと此野の原の野守とはなれるべし。

## 銀河序 元祿二年

北海道に行脚して越後國出雲崎といふ所に泊る。かの佐度が島は海の面十八里滄波を隔て東西三十五里に横をり臥たり。みねの嶮難谷の隈々迄流石に手にとる斗あざやかに見えわたる。むべ此島はこがね多く出てあまねく世の寶となれば限りなき目出たき島にて侍るを、大罪朝敵の類ひ遠流せらるゝによりて、只おそろしき名の聞えあるも本意なき事に思ひて、窓押開て暫時の旅愁をいたはらんとする程日既に海に沈て、月ほのくらく銀河半天にかゝりて、星きら〳〵と冴えたるに沖のかたより浪の音しば〳〵運びて、魂けづるがごとく、腸ちぎれてそゞろにかなしびきたれば草の枕も定らず。墨の袂



何故とはなくてしぼるばかりになん侍る。

荒海や佐渡に横たふあまの川

## 伊勢紀行之跋 元祿四年

ねなし草の花もなく實もみのらず、たゞ賤しき口にいひのゝしれるたはぶれごとの世なるを、其角ひとゝせ都の空に旅寢せしころ向井氏去來のぬしむつまじきちぎりありて酒のみ茶にかたる折々甘き辛きしぶき淡き心の水の淺きより深きを傳へて、終に一掬して百川の味ひをしれるなるべし。今年の秋いもうとをゐて伊勢に詣づ。白川の秋風よりかの濱荻の聲を聞てとまり〳〵のあはれなることゞもがたはし書あらはして、我草の戸の案下におくる。一たび吟じて感を起しふたゝび誦して感をわする。三たびよみてその無事なることを覺ゆ。此人やこの道至れり盡せり。

西東あはれさひ壺とつの秋のか

## 虚栗集跋 天和二年

栗とよぶ一書其味四つあり。

李杜が心酒をなめて、寒山が法粥を啜る。これに仍て其句を見るに、はるかにしてきくに遥し。佗と風雅のその生にあらぬは、西行の山家を尋て、人の拾はぬ蝕栗也。戀の情つくし得たり。むかしは西施か振袖の顔、黄金鑄ル小紫ニ上陽人の閨の中には衣桁に蔦のかゝるまで也。

下の品には眉こもり親添ひの娘、娵姑のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假字にやつして、初心をすくふたよりならんとす。

其語震動虚實をわかたず、寶の鼎に句を煉て、龍の泉に文字を冶ふ。是必他のたからにあらず。汝か寶にして後のぬす人を待。

## 蓑蟲跋　貞享三年

草の戸さしこめて物わびしき折しもたま〳〵みの虫の一句をいふ。我友素翁はなはだあはれがりて、詩を題し文をつらぬ。其詩や錦をぬひものにし其文に玉をまろばすがごとし。つら〳〵見れば離騒のたくみあるに似たり。また黄奇蘇新あり。はじめに虞舜曾參の孝をいへるは人にをしへをとれとや。其無能を感る事ふたゝび南華の心を見よとや。終に玉むしのたはぶれは色をいさめんとならし。翁に



あらずば誰か此虫の心をしらん。靜に見れば物みな自得すといへり。此人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人おほくは花にふけりて、實をそこなひ實をこのみて、風流をわする。此文やはた其花を愛すべし。實なほくらひつべし。爰に何某朝湖と云あり。此事を傳聞て、これを畫く。まことに丹青淡々しく情こまやかなり。心をとゞむれば虫うごくがごとく、黄葉落るかとうたがふ。耳をたれて是をきけば其むし聲をなして、秋の風そよ〳〵とさぶし。猶閑窓に閑をえて兩士の幸にあづかること、みのむしのめいほくあるに似たり。

## 澁笠銘　天和二年

草の扉にひとりわびて秋風さびしき折〳〵竹取のたくみに習ひ、妙観がかたなをかりて、自ら竹をきり竹をけづりて、笠つくりの翁と名のる。心しづかならざれば日をふるに物うく、工みつたなければ夜をつくしてならず。あしたに紙を重ねゆふべにほして又重ね〳〵澁といふ物をもて色をさはしますます〳〵堅からん事を思ふ。二十日過る程にこそやゝいできにけれ。其かたちうらの方にまき入、外ざまに吹返りなど荷葉の半ひらくるに似て、なか〳〵をかしき姿也。さらばすみかねのいみしからんよりゆがみながらに愛しつべし。西行のふじ見笠か東坡居士か雪見笠か宮城野の露に供つれねば、呉天の

雪に杖をや曳ん。簑にさそひ時雨にかたふけ、そゞろにめでゝ殊に興ず。興のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも假のやどりに袂をうるほして、みづから笠の裏に書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどりかな

## 瓢之銘　貞享元年

一瓢重黛山　自咲稱箕山
莫慣首陽餓　這中飯顆山　山素堂

顏公のかきほに生るかたみにもあらず、惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさご有。是をたくみにつけて花入る器にせんとすれば大にしてのりにあたらず。さゝえにつくりて酒をもらんとすればかたち見る所なし。或人の曰草庵のいみしき糧入つべきものなりと。誠によもぎの心あるかな。やがて用ひて隱士素翁に乞て、これが名をえさしむ。其ことばは右に記す。其句皆山を以ておくらるゝが故に四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜が住る地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁李白にかはりて我貧を淸くせんとす、かつむなしき時はちりの器となれ。得る時は一壺も千金をいだきて黛山もかろしとせんことしかり。



物ひとつ瓢はかろきわが世かな　芭蕉桃青書

## 机之銘　元祿六年

間なる時は臂をかけて嗒焉吹噓の氣をやしなふ。閑なる時は書を紐といて聖意賢才の精神を探り靜なる時は筆を取りて羲素の方寸に入。たくみなすおしまつき一物三樣をたすく。高さ八寸面二尺兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして潛龍牝馬の貞に習ふ、是をあけて一用とせん。又二用とせんや、

應蘭子求　元祿仲冬　芭蕉書

## 座右銘　元祿四年

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云

ものいへば脣寒し秋のかぜ

## 自得箴

もらふてくらひ乞てくらひ肌寒わづかにのがれて、
　めでたき人の數にもいらん年のくれ

## 閑居箴　貞享三年

あら物ぐさの翁や日頃は人の問来るもうるさく、人にもまみえじ人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず獨酒のみて心にとひ心にかたる。庵の戸押あけて雪をながめ又は盃をとりて筆を染筆を捨。あら物くるほしの翁や。

　酒のめばいとゝ寢られぬ夜の雪

## 杵折賛　貞享四年

此杵の折と名付るものは、上つかたにてめでさせ給ひ、めでたき扶桑の奇物となれり。汝いづれの山より出て、何國の里の賤が碪のかたみ成ぞや。昔は横槌たり。今は花入と呼て貴人頭上の具に名を改



と云り。人又かくのごとし。高きにゐて驕るべからず。ひくきに在てうらむべからず。只世の中は横槌なるべし。

　此槌のむかし椿か梅の木か

## 西行上人像讃

すて果て身はなきものと思へども
　雪のふる日はさぶくこそあれ
　花のふる日はうかれこそすれ

## 卒都婆小町賛

あなたふと〳〵簑も尊し笠も尊とし。いづれの人か語りつたへ、いかなる人か寫しとゞめて千歳はまぼつし今爰に現す。其かたちある時はたましひも又爰にあらん。簑も尊し笠もたふとし。

　たふとさや雪ふらぬ日もみのと笠

## 石臼頌

市中に有て俗塵によごれぬ物はげに其はじめをよくするよりも其終をとぐる事はかたし。商山竹林の隠士も猶出て仕へ、寛平花山の上皇も終りたしかならず。たま〳〵是を見るに只石臼のひとつのみ。聖一國師ば是をもて肉身を養ひ法身をしる。民家には又麥刈初る比よりも籾こきおとす冬に至る迄、片時も餘所にする事なし。其高き事を論ずれば役優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひを道引空きり上に立べし。上と下とふたつなるは、力たらざる者の爲に專らなれば也。不斷土間にあつて縫より外を見ぬは、謙に居る事の調べにあらずや。かりにも黄姉の手にとられざる事のありがたき事をふかくさぐりしるべし。目なだらかなる時はかますを擔ふ老翁の出來りて、こつ〳〵とする音すみて後は、季札か劍を塚にかくることをまつべし。名を盜む盜人はあれど石臼を盜む盜人はなし。又人の心をみだささるの至りならずや。月さしのぼる夕顔の陰に、ひとりはおどろの髪をまくね、ひとりは佛のまねをする天窓なりにてくるしき事を覺えず。挽まはすちからに其飢をたすくるは、文王の始につかへ給へるに事たがはず。やゝいまやうのむつかしき歌の節にもかまはず聲も唱歌も古代のまゝにして枝もさかゆる葉もしげると、しはぶきかちにわなゝかれたるぞをかしきや。



## 雲竹自畫像

洛の桑門雲竹自の像にやあらん。あなたの方に額ふりむけたる法師を畫てこれに讃せよと申されければ、君は六十年あまり予は旣に五十年にちかし。ともに夢中にして夢の形をあらはす。是にくらふるに寢言を以てす。

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

## 贈風絃子

風絃は琴にあらず瑟にあらず彈に爪を用ひず。柱をたてず天籟の譜を能く調べて、角徴宮商の音におちず。

## 贈洒堂

湖水の磯を這出る田螺一疋、芦間の蟹のはさみをおそれよ、牛にも馬にも踏るゝ事勿れ。

難波津や田螺の蓋も冬こもり

## 與或人文 元祿三年

大和國長尾の里といふ所はさすがに都遠きにあらず、山里にして山里にあらず。心あるさまにて老たる母のおはしけるを其家のかたにしつらひ、庭前に木草のをかしけなるを栽置て、岩尾めづらかにすゑなし、手つから枝をため、石を撫ては蓬萊の島ともなりぬ。いく樂とりてんよと老母につかへなぐさめなどせし實ありけり。家まづしくして孝をあらはずとこそ聞くなれ。まづしからずして孝を盡す古人もかたきことになん云ける。

冬しらぬ宿や籾する音あられ

## 烏之賦

一烏小大有て名を異にす。小を烏鵲といふ、大を鵜太といふ。此烏反哺の孝を讃して烏中の曾子に比す。或は人家に行く人をつけ銀河に翅をならべて二星の媒となれり。或は大年のやどりをしりて春風をさとり巢を改むといへり。雪の曙の辭寒けに夕に寢所へ行なんど詩歌の才士も情あるに云なし、繪にもかゝれてかたちを愛す。只貪猶の中にいふ時はその德大也、又汝が罪をかぞふる時は其德小にし



て害又大なり。就中かの鵜太は性佞强惡にして、鷲の翅をあなどり、鷹の爪のときことを恐れず。內は鴻雁の味もなく、聲は黃鳥の吟にも似ず。啼時は人不正の氣を抱て、かならず凶事をひいて、愁をむかふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野に有ては田畑を費す。糧に辛苦の勞をしらずや。或は雀のかい子をつかみ、池の蛙をくらふ。人の尸をまち、牛馬の腸をむさぶりて、終にいかの爲に命をあやまり、鵜の眞似をしてあやまりを傳ふ。是みな汝むさぶる事大にして其智を貴ざる誤也。汝がごとき心貪慾にしてかたちを墨に染たる人に有て賣僧といふ。釋氏も是をにくみ、俗士も甚うとむ。嗚呼汝よくつゝしめ羿か矢先にかゝつて三足の金烏に罪せられんことを。

## 東順傳

老人東順は榎氏にして其祖父江州堅田の農士竹氏と稱す。榎氏といふものは晉子が母方によるものならし。ことし七十歲ふたとせの秋の月をやめる枕の上に詠めて、花鳥の情露を悲しめる思ひかぎりの床のほとりまで神亂れず。終に更科の句を形見として大乘妙典の臺に隱る。若かりし時醫を學びて恒の產とし本多何某の公より俸餞を得て、釜魚甑塵の愁すくなし。されども世路をいとひて名聞の衣を破り、杖を折て業を捨、旣に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて樂む爰筆をはなさず。机をさら

ぬ事十とせ餘り、其筆のすさみ車にこぼるゝがごとし。湖上に生れて東野に終りをとる。是かならず大隱朝市の人なるべし。

入月の跡は机の四隅かな

## 嵐蘭誄

金革を褥にしてあへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり九とせにや。此三とせばかり官を辭して岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとしていまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日々風雲に坐して今年仲秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳。其かへるさより心地なやましうして、終に息絶えぬ。おなじき二十七日の夜の事にや、七十歳の母に先だち七歳の稚子に思ひを殘す。いまだをしむべき齢の五十年にだにたらず。公の爲には腹おし切ても悔まじきうつはの、はかなき秋風に吹しほれたる草の袂、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに老母のうちはちからのなけき、したしきかぎりは聞傳へて、偏に親族の別れにひとし。過つる睦月ばかりに稚子



が手を取て予が草庵に來り、かれに號を得さすべきよしを乞。王戎五歳の眼差し美はしと、戎の一定を摘て蘭戎と名づく。其よろこべる色今目のあたりをさらず。いける時むつましからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝならひ、まして父のごとく子のごとく手のごとく足のごとく年頃いひなれむつびたる俤の、愁の袂にむすほれて枕もうきぬべき斗也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふたがりてたゞおしまつきにかゝりて夕の雲にむかうのみ。

秋風に折てかなしき桑の杖

## 弔初秋七日雨星 元祿六年

元祿六文月七日の夜風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき二星も屋形を失ふべし。今宵猶たゞに過さんも殘り多しと、一燈かゝげ添へる折から遍照小町が歌を吟ずる人あり。是によりて此二首を探て雨星の心をなぐさめんとす。

小町が歌

高水に星もたびねや岩のうへ　芭蕉

七夕にかさねはうとし絹合羽　杉風

# 紀行集 附 日記

# 奥の細道　元祿二年

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひてやゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取物手につかず。股引の破れをつゞり笠の緒付かへて三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住る方は人にゆづり杉風が別墅にうつるに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱にかけ置、やよひも末の七日、明ほのゝ空朧々として、月は有明にて光をさまれる物から不二の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつどひて船にのりて送る。千じゆと云處にて舟をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて幻のちまたに離別の涙をそゝぐ。

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立のはじめとして、行道猶すゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげの見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚只かり初におもひ立て、呉天に白髮のうらみを重ぬといへ共、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、もし生て踊らばと定めなき頼みの末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり着にけり。痩骨の肩にかゝれる物先苦しむ。只身すがらにと出立侍るを、紙子一衣はよるの防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたきはなむけなどしたるはさすがに打捨がたくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

室の八島に詣づ。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て富士一體也。無戸室に入て焼給ふちかひのみ中に、火々出見尊生れ給ひしより室の八島と申、又けふりをよみならはし侍るも此謂なり將このしろと云魚を禁ず。縁記のむね世に傳ふことも侍し。

卅日、日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、我名を佛五左衞門と云、萬正直を旨とする故に人かくは申侍るまゝ、一夜の草の枕も打解て休み給へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、斯る桑門の乞食順禮如きの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとゞめて見るに、只無智無分別にして正直偏固の者也。剛毅木訥の仁に近きたぐひ氣稟の淸質尤尊ぶべし。



卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此御山を二荒山と書しを、空海大師開基の時日光とあらため給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此御光り一天にかゞやきて恩澤八荒にあふれ四民安堵のすみか穩也。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたふと青葉わか葉の日の光

黒髮山は霞かゝりて雪いまだ白し。

剃捨て黒髮山にころもがへ　　曾良

曾良は河合氏にして惣五郎といへり。芭蕉の下葉に軒をならべて予が薪水の勞をたすく。此たび松島象潟のながめともにせん事を悦び、且は羇旅の難をいたはらんと旅立曉髮を剃て墨染にさまをかへ、惣五を改て宗悟とす。仍て黒髮山の句あり。更衣の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登りて瀧有。岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て瀧の裏より見ればうらみの瀧と申傳侍るなり。

しばらくは瀧にこもるや夏の始

那須の黒はねと云處にしる人あれば、是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遠に一村を見かけて行に雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈なのこに

嘆きよれば野夫といへども、さすがに情しらぬには非ず。いかゞすべきや。されども此野は縱横にわかれてうひ〳〵しき旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば此馬のとゞまる處にて馬をかへし給へと、かし侍りぬ。ちさきものふたり馬の跡したひてはしる。獨は小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重なでしこの名なるべし　　曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結付て馬を返しぬ。黑羽の館代淨坊寺何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜かたりつゞけて其弟桃翠など云が朝夕つとめ訪らひ、みづからの家にも伴ひて、親屬の方にもまねかれ日を經るまゝに、ひと日郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須のしの原をわけて玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。與市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八まんとちかひしも此神社にて侍ると聞ば感應殊にしきりに覺えらる。暮れば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺と云有。そこにまねかれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途かな

當國雲岸寺のおくに佛頂和尙山居の跡有。

たてよこの五尺にたらぬ草のいほ



むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍るといつぞや聞え給ふ。其跡見んと雲岸寺に杖を曳けば、人々すゝんで共にいざなひ、若き人おほく道のほど打さわぎておぼえずかの麓に至る。山はおくあるけしきにて、谷道はるかに松杉黑く苔したゝりて卯月の天今猶寒し。十景盡る所橋を渡て山門に入。さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟に結ひかけたり。妙禪師の死關法雲法師の石室を見るが如し。

木つゝきも庵は破らず夏木立

と取敢ぬ一句を柱に殘し侍りし。是より殺生石に行。館代より馬にて送らる。此口付のをのこ短冊得させよと乞。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を橫に馬ひきむけよほとゝぎす

殺生石は溫泉の出る山かげに有。石の毒氣いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又淸水ながるゝの柳は芦野の里にありて田の畔に殘る。此處の郡守戶部某の此柳見せばやなどをり〳〵にのたまひ聞え給ふを、いづくのほどにやとおもひしを、今日此柳のかげにこそたちより侍りつれ。

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へとたよりもとめしもことわりなり。中にも此關は三關の一にして風騷の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲そひて雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝をあらためし事など、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

うの花をかざしに關の晴着かな　曾良

とかくしてこえゆくまゝに、あぶくま川をわたる。左に會津根高く、右に岩城相馬三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。かげ沼と云處を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の驛に等躬と云ものを尋て四五日とゞめらる。先白川の關いかにこえつるやと問。長途の苦しみ身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ懷舊に腸を斷てはか〴〵しう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植歌

無下にこえんもさすがにとかたれば、脇第三とつゞけて三卷となしぬ。此宿の傍に大なる栗の木かげをたのみて世をいとふ僧有。橡拾ふ太山もかくやとそゞろにおぼえられて物に書付侍る其詞、

栗と云文字は西の木と書て西方淨土にたよりありと



行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用ひ給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等躬が宅を出て五里ばかり、檜皮の宿を離れてあさか山有。道よりちかし。此あたり沼多し。かつみ刈ころもやゝ近うなれば、いづれの草を花かつみとは云ぞと人々に尋侍れども、更に知人なし。沼を尋人に問かつみ〳〵と尋ねありきて日は山のはにかゝりぬ。二本松より右にきれて黑塚の岩屋一見し福島に宿る。あくればしのぶ文字摺の石を尋て忍の里に行。遙か山かげの小里に石半土に埋てあり。里の童部の來りてをしへける、昔は此山の上に侍りしを、往來の人麥草をあらして此石をこゝろみ侍るをにくみて、此谷につき落せば石の面下ざまにふしたりと云。さも有べき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

月の輪のわたしを越て瀨の上と云宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は左の山際一里半ばかりに有。飯塚の里鯖野と聞て尋々ゆくに丸山と云に尋あたる。是庄司が舊館也。麓に大手の跡など人の敎るにまかせて泪を落し、又傍の古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれどもかひ〴〵しき名の世に聞えつるものかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞ばこゝに義經の太刀辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事也。其夜飯塚に泊る。温泉あれば湯に入て宿をかるに、土座に筵を敷てあやしき貧家なり。灯もなければいろりの火かげに寢處をもうけて臥す。夜に入て雷鳴雨しきりに降て、臥る上よりもり、蚤蚊にせゝれて眠らず。持病さへ發りて消入ばかりになん。みじか夜の空も漸明れば、又旅立ぬ。猶夜の餘波心すゝまず。馬かりて桑折の驛に出る。遙なる行末をかゝへて斯る病おぼつかなしといへど、羇旅邊土の行脚捨身無常の觀念、道路に死なん是天の命なりと氣力いさゝか取直し、道縱横に踏て伊達の大木戸を越す。鐙摺白石の城を過、笠島の郡に入ば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、これより遙か右に見ゆる山際の里をみのわ笠島と云。道祖神の社かたみの薄今にありと敎ゆ。此頃の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながらながめやりて過るに、簑輪笠島も五月雨の折にふれたりと、

笠じまはいづこ五月のぬかり道

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師おもひ出ず。往昔むつの守にて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あるは伐、或は植繼などせしと聞に、今將千歳のかたちとゝのほひて、めで度松のけしきになん侍りし。

たけくまの松見せ申せ遲さくら、と擧白といふものゝ餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月越

名取川を渡て仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。こゝに畫工加右衞門と云ものあり、いさゝか心あるものと聞て知人になる。此もの年頃さだかならぬ名處を考置侍ればとて一日案内す。宮城野の萩茂りあひて秋の氣色おもひやらるゝ。玉田橫野つゝじが岡はあふひ咲ころ也。日かげも洩ぬ松の林に入て爰を木の下と云とぞ。昔もかく露深ければこそみさぶらひみかさとはよみたれ。藥師堂天神の御社など拜みて其日は暮ぬ。猶松島鹽がまの處々畫に書て贈る。且紺の染緖付たる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの爰に至て其實をあらはす。

あやめ草足に結はんわらぢの緖

かの畫圖にまかせてたどりゆけば、おくのほそ道の山際に十符の菅あり。今も年々十符の菅菰を調て國守に獻ずと云り。

壺碑　　市川村多賀城に有

つほの石ぶみは高さ六尺餘横三尺斗歟。苔を穿て文字幽也。四維國界の數里を記す。此城神龜元年按察使鎭守府將軍大野朝臣東人之所里也大平寳字六年參議東海東山節度使鎭守府將軍惠美朝臣朝獦修造也十二月朔日と有。聖武皇帝の御時に當れり。昔よりよみおける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて其跡たしかならぬ事のみを、こゝに至て疑ひなき千歳のかたみ今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德存命の悦び羈旅の勞をわすれて泪も落るばかりなり。

それより野田の玉川沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造て末松山と云。松の間々みな墓原にて、はねをかはし枝をつらぬる契りの末も終りは斯の如きと悲しさも增りて鹽がまの浦に入相の鐘を聞。五月雨の空いさゝかはれて夕月夜幽に、籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴わかつ聲々につなかなしもとよみけん心もしられていとゞ哀也。其夜目盲法師の琵琶をならして奧淨るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うちあげて枕ちかうかしがましけれど、さすがに邊土の遺風わすれざるものから殊勝に覺えらる。早朝鹽かまの明神に詣。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに石の階九仭に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。斯る道の果塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそ吾國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寳燈あり。かねの戸び



らの面に文治三年和泉三郎寄進と有。五百年來の佛、今目の前にうかびてそゞろに珍らし。かれは勇義忠孝の士也。佳名今に至てしたはずと云事なし。誠に人能道をつとめ義を守べし、名もまたこれにしたがふといへり。日既に午に近し。舟をかりて松島に渡る。其間二里餘、雄島の磯につく。

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指さし、伏ものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゝみて、左にわかれ、右につらなる。おへるあり抱る有。兒孫を愛すがごし。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹撓めて、屈曲おのづからためたるが如し。其氣色窅然として、美人の顏を粧ふ。千はやふる神のむかし大山すみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて海に出たる島也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。はた松の木かげに世をいとふ人も稀々見え侍りて、落穗松かさなどうちけふりたる草の庵しづかに住なし、いかなる人とはしられずながら先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて晝のながめ又あらたむ。江上に歸て宿をもとむれば、窓をひらき二階を作て風雲の中に旅ねするこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松しまや鶴に身をかれほとゝぎす　　曾良

予は口を閉て、眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうら島の和歌を贈らる。袋を解てこよひの友とす。且杉風濁子が發句有。

十一日瑞岩寺に詣。當時三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の徳化に依て、七堂甍改りて、金壁莊嚴光をかゞやかし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。かの見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞傳へて人跡稀に雉兎蒭蕘のゆきかふ道そこともわかず。終に道ふみたがへて、石の卷と云みなとに出。こがね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、かまどの煙たちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれど更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜を明して、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり尾ぶちの牧、まのゝ萱原などよそめに見て、遙なる堤を行。心細き長沼にそうて、戸伊摩と云處に一宿して、平泉に至る。其間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金雞山のみ形を殘す。先高館にのほれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入。康衡等が舊跡は衣ケ關を隔て南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐり



て此城に籠り、功名一時の草むらとなる。國破れて山河あり、城春にして草靑みたりと、笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢のあと

うの花に兼房見ゆる白毛かな　　曾良

かねて耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散うせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽て、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新にかこみて甍を覆て風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

さみだれの降のこしてや光堂

南部道遙に見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎みつの小島を過て、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽國に越んとす。此路旅人稀なる處なれば、關守にあやしめられて漸として關をこす。大山をのぼりて日既に暮ければ、封人の家を見かけて舍りを求む。三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

蚤しらみ馬の尿する枕もと

あるじの云、これより出羽國に大山を隔て道さだかならざれば、道しるべの人を、たのみて越べき山を申す。さらばと云て、人を賴侍れば、究竟の若者反脇差を横たへ、樫の杖を携て、我々が先に立て行。

けふこそ必危きめにもあふべき日なれと、からき思ひなして後について行。あるじの云にたがはず、高山森々として一鳥聲聞ず。木の下闇しげりあひて夜る行が如し。雲端につちふる心地して篠の中踏分々々水をわたり、岩に躓て肌につめたき汗を流して最上の庄に出。かの案内せしをのこの云やう、此道必不用の事有。恙なう送りまゐらせて仕合したりと悦てわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのみ也。

尾花澤にて清風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども志いやしからず。都にも折々かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日頃とゞめて長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我やどにしてねまる也

はひ出よかひ屋が下のひきの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがたかな　曾良

山形領に立石寺と云山寺有。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地也。一見すべきよし人々のすゝむるに依て、尾花澤より取てかへし、其間七里斗也。日いまだ暮ず、麓の坊に宿かり置て山上の堂にのぼる。岩に巖をかさねて山とし、松柏年ふり土石老て苔滑に岩上の院々扉を閉て物の音聞えず。岸をめぐり岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行のみ覺ゆ。



しづかさや岩にしみ入蟬のこゑ

最上川をのらんと大石田と云處に日和を待つ。こゝに古き誹諧の種こぼれて、わすれぬ花のむかしをしたひ蘆角一聲の心をやはらげ、此道にさぐり足して新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一卷殘しぬ。此たびの風流こゝに至れり。

最上川はみちのくより出て、山形を水上とす。ごてんはやぶさなど云おそろしき難所あり。板敷山の北を流れて果は酒田の海に入。左右山覆ひ茂みの中に船を下す。是に稻つみたるをやいなふねと云ならし。白糸の瀧は青葉の隙々に落て、仙人堂岸に臨て立。水みなぎりて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最早川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云者を尋て、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍りして憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において誹諧興行

有がたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有。書寫黑の字を里山となせるにや。羽州黑山を中略して羽黑山と云にや。出羽といへるも鳥の毛羽

を此國の貫に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに圓頓融通の法の灯かゝげそひて僧坊棟をならべ、修驗法を勵し、靈山靈地の驗効人貴ひ且恐る。繁榮長にしてめでたき御山と謂つべし。

八日、月山に登。木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭を包、强力と云者に道びかれて雲霧山氣の中に氷雪を踏て登る事八里、更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゞえて頂上に臻れば、日沒て月顯る。笹を敷篠を枕として臥て明るを待。日出て雲消れば湯殿に下る。谷の傍に鍛冶小屋と云有。此國の鍛冶靈水を選てこゝに潔齋して劍を打終、月山と銘をきりて世に賞せらる。かの龍泉に劒を淬とかや。干將莫耶の昔をしたふ道に堪能の執淺からぬ事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど三尺ばかりなる櫻のつぼみ半ばひらけるあり。降積雪の下に埋て春をわすれぬ遲櫻の花のこゝろわりなし。炎天の梅花こゝに薫るが如し。行尊僧正の歌の哀もこゝに思ひ出て猶まさりて覺ゆ。惣而此山中の微細行者の法式として、他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。坊に歸れば阿闍梨の需に依て、三山順禮の句々短册に書。

涼しさやほの三日月の羽黒山

雲の峰いくつ崩れて月の山



語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道のなみだかな　　曾良

羽黒を立て、鶴岡の城下長山氏重行と云もののふの家にむかへられて誹諧一卷有。左吉も倶に送りぬ。川舟に乘て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云醫師の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海に入たり最上川

江山水陸の風光數を盡して今象潟に方寸を責め、酒田の湊より東北の方山を越、礒を傳ひいさごを踏て其際十里、日影やゝかたふく頃、汐風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色また賴母敷と、あまの苫屋に膝を入て雨の晴を待。其朝天能晴て朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて三年幽居の跡を訪らひ、むかうの岸に舟をあがれば、花の上こぐと詠れし櫻の老木西行法師の記念を殘す。江上に御陵あり。神功后宮の御墓と云寺を干滿珠寺と云。此處に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に坐して簾を捲ば風景一眼の中に盡て、南に鳥海天をさゝへ其陰うつりて江に有。西はむや〳〵の關路をかぎり、東に堤を築て秋田に通ふ道遙に海北にかまへて浪打入る處を汐ごしと云。江の縱橫一里ばかり俤松島

にかよひて又異なり。松島は咲ふがごとく象潟はうらむがごとし。さびしさに悲しひをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

きさがたや雨に西施がねふの花

汐ごしや鶴脛ぬれて海すゞし

祭禮

象潟や料理何くふ神まつり　曾良

あまの家や戸板を敷て夕すゞみ　みのゝ國の商人　低耳

岩上に雎鳩の巣を見る

浪こえぬ契りありてやみさごの巣　曾良

酒田の餘波日かさねて北陸道の雲に望む。遙々の思ひ胸をいたましめて加賀の府まで百三十里と聞。鼠の關をこゆれば、越後の地にあゆみをあらためて、越中國一ふりの關に至る。此間九日暑濕の勞に神をなやまし病發りて事を記さず。

文月や六日も常の夜には似ず

あら海や佐渡によこたふあまの河



今日は親しらず子しらず犬もどり駒がへしなど云、北國一の難所を越てつかれ侍ば、枕引よせて寢たるに、一間隔て面の方にわかき女の聲二人斗と聞ゆ、年老たるをのこの聲も交て物語するをきけば、越後國新潟と云所の遊女なりし。伊勢參宮するとて此關までをのこの送て、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白波のよする汀に身をはふらかし、あまの子の世をあさましう下りて定めたき契り日々の業因いかにつたなしと、ものいふを聞々寢入てあした旅立に、我々にむかひてゆくへしらぬ旅路のうさ、餘り覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結緣せさせ給へと涙を落す。不便の事には侍れども、我々は處々にてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護必つゝがなかるべしと云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る。くろへ四十八ヶ瀬とかや數しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも初秋の哀といふべきものをと、人に尋ればこれより五里磯づたひしてむかうの山陰に入り、蜑の苫ぶきかすかなれば蘆の一夜の宿かすものあるまじといひおどされて加賀國に入。

わせの香やわけ入右は有磯海

卯の花山くりからが谷を越て、金澤は七月中の五日也。こゝに大阪よりかよふ商人何處と云ものあり。それが旅宿を倶にす。一笑と云ものは此道にすける名のほの〴〵聞えて、世に知人も侍しに去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動け我泣聲は秋のかぜ

ある草庵にいざなはれて

秋すゞし手ごとにむけや瓜茄子

途中唫

赤々と日は難面もあきの風

小松と云處にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

此處、太田の神社に詣。眞盛が甲錦の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公よりたまはらせ給ふとかや。けにも平士のものにあらず。目庇より吹かへしまで菊から草のほりもの、金をちりばめ龍頭に鍬形打たり。眞盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此社にこめられ侍よし。樋口次郎が使せし事どもまのあたり緣記に見えたり。



むざんやな甲の下のきり〴〵す

山中の溫泉に行ほど、白根が嶽跡に見なして歩む。左の山際に觀音堂あり。花山法皇三十三所の順禮遂させ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて那谷と名付給ふとかや。那智谷組の二字をわかち侍しとぞ。奇石さま〴〵に古松植ならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて殊勝の土地也、

石山の石より白し秋のかぜ

溫泉に浴す其功有明に次と云。

山中や菊は手をらぬ湯のにほひ

あるじとする者は久米之助とていまだ小童也。かれが父誹諧を好み、洛の貞室若輩のむかしこゝに來りし頃、風雅にはづかしめられて、洛に歸て貞德老人の門人と成て世にしらる。功名の後此一村判詞の料を請すと云。今更むかしがたりとは成ぬ。

曾良は腹を病て伊勢國長島と云處にゆかりあれば先立て行に、

行〳〵てたふれ伏とも萩のはら　　曾良

と書置たり。行ものゝ悲しひ、殘るものゝうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふが如し。予もまた

けふよりや書付けさん笠の露

大聖寺の城外全昌寺と云寺に泊る。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊りて、

　終宵秋風聞やうらの山

と殘す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞つゝ衆寮に臥ば明ぼのゝ空近う讀經聲すむまゝに鐘板鳴て食堂に入。けふは越前の國へと心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追來る。折節庭中の柳ちれば、

　庭掃て出るや寺にちる柳

取あへぬさまして草鞋ながら書捨つ。越前の境吉崎の入江を舟に棹して汐越の松を尋ぬ。

　夜もすがら嵐に浪をはこばせて
　　月をたれたる汐ごしの松　　　西行

此一首にて數景盡たり。もし一辯を加ふるものは無用の指を立るがごとし。

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又金澤の北枝と云もの假初に見送て此處までしたひ來る。處々の風景過さず思ひつゞけて折節あはれなる作意など聞ゆ。今既に別に望みて、

　物書いて扇引さく餘波かな

五十丁山に入て永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機千里を避てかゝる山陰に跡を殘し給ふも貴き故有とかや。福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出るに、たそがれの道たど〳〵し。こゝに等栽と云古き隱士あり。いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙か十とせ餘也。いかに老さらぼひてあるにや、將死けるにやと、人に尋ね侍れば、いまだ存命してそこ〳〵と教ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕がほ糸瓜のはえかゝりて雞頭帚木に戸ぼそを隱す。さては此うちにこそと門をたゝけば、侘しげなる女の出て、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや、あるじは此あたり何がしと云ものゝ方に行ぬ。もし用あらば尋給へと云。かれが妻なるべしとしらる。昔物がたりにこそ斯る風情は侍れと、やがて尋あひて其家に二夜とまりて名月はつるがのみなとにと旅立。等栽も倶に送らんと裾をかしうからげて、道の枝折とうかれ立。漸白根が嶽かくれて比那が嵩あらはる。あさむつの橋を渡りて玉江の芦は穗に出にけり。鶯の關を過て湯尾峠を越れば燧が城、歸山に初鴈を聞て、十四日の夕暮つるがの津に宿をもとむ。其夜月殊に晴たり。あすの夜も斯有べきにやといへば、越路習ひ猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて松の木間に月のもり入たるおまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起のこと有てみづから草を刈土石を荷ひ、泥渟をかわかせて參詣、往來の煩ひなし。古例今に絕ず神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると亭主のかたりける。

月淸し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降。

名月や北國日和さだめなき

十六日、空はれたればますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云ものの破籠小竹筒などこまやかにしたためさせ、僕あまた舟に取のせて、追風時の間に吹著ぬ。濱はわずかなるあまの小家にて、侘しき法華寺有。爰に茶を飲酒をあたゝめて夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

さびしさや須磨にかちたる濱の秋

波の間や小がひにまじる萩の塵

其日のあらまし等裁に筆をとらせて寺に殘す。路通も此みなと迄出むかひてみのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば曾良も伊勢より來りあひ、越人も馬を飛せて如行が家に入集る。前川子荊口父子其外したしき人日夜訪ひて、蘇生のものに逢がごとく且悦び且いたはる。旅の物うさもいまだ止ざるに長月六日になれば伊勢の遷宮拜んと又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ



# 鹿島紀行 貞享四年

洛の貞室須磨の浦の月見に行て、

松かげや月は三五夜中納言

と云けん狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋鹿島の山の月見んと思ひ立ことあり。伴ふ人二人、浪客の士獨り、一人は水雲の僧、僧はからすのごとくなる墨の衣に三衣の袋を衿に打かけ、出山の尊像を厨子にあかめ入てうしろに背負、柱杖曳ならして無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出でぬ。今ひとりは僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうふりの鳥なき島にもわたりぬべく、門より船に乘て行德と云處に至る。舟をあがれば馬にものらず、細脛の力をためさんと、かちよりぞ行く。甲斐の國より或人の得させたる檜木もてつくれる笠を各々いたゞきよそひて、八幡と云里を過ぐれば、かまかひの原と云ひろき野あり。秦甸に一千里とかや、目もはるかに見わたさるゝ筑波山、むかうに高く二峰並び立てり。かの唐土に双劔の峯ありと聞えしは廬山の一隅なり。

雪は申さず山はむらさきのつくばかな

と詠しは我門人嵐雪が句也。すべて此山は日本武尊の言葉を傳へて、連歌する人のはじめにも名付た

り。和歌なくば有べからず、句なくば過ぐべからず。誠に愛すべき山の始なりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて、爲仲とやらんの長櫃に折入て、都のつとに持せたる風流にくからず。きちかう女郎花かるかや尾花みだれ合て、小男鹿の妻こふ聲いとあはれなり。野の駒處得がほにむれありく、又哀なり。日既に暮かゝる程に、利根川のほとり布佐と云處に著く。此川にて鮭の網代と云ものをたくみて、武江の市にひさぐ者あり。宵の程其漁家に入てやすらふ。夜の宿なまぐさし。月くまなく晴けるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。ひるより雨しきりに降て月見るべくもあらず。この麓に根本寺のさきの和尙、今は世をのがれてこの處におはしけると云を聞て、尋ね入て臥ぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく淸淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝか晴れけるを、和尙おこし驚し侍れば、人々起出でぬ。月の光雨の音只哀れなる氣しきのみむねにみちて云べき言の葉もなし。はる〴〵と月見に來たる甲斐なきこそ本意なきわざなれとかの何がしの女すら時鳥の歌得よまで歸りわづらひしも、我がためにはよき荷擔の人ならんかし。

をり〳〵にかはらぬ空の月かけも
　ちゞのながめは雲のまに〳〵　　和　尙

月はやし梢は雨を持ながら



寺にねてまことがほなる月見かな

雨に寢て竹おきかへる月見かな　　曾　良

月さびし堂の軒端の雨しづく　　宗　波

# 芳野紀行 元祿元年

百骸九竅の中に物あり。かりに名付て風羅坊と云。誠にうすものゝ風に破れやすからん事を云にやあらん。かれ狂句を好む事久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦いて放擲せん事を思ひ、ある時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかうて是が爲に身安からず。しばらく身を立んことをねがへども、これが爲にさへられ、しばらく學て愚をさとさん事を思へども、是がために破られ、終に無能無藝にして、只此一筋につながる。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫通する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずと云事なし。おもふ處月にあらずと云事なし。像花にあらざる時は、夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出鳥獸をはなれて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

神無月の初空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人とわが名呼れん初しぐれ
また山茶花を宿〳〵にして



岩城の住長太郎と云もの、此脇を付て其角亭に關送りせんともてなす。

時は冬よし野をこめん旅のつと

此句は露沾公より下し給はらせ侍りけるをはなむけの初として、舊友親疎門人等、あるは詩歌文章をもて訪ひ或は草鞋の料を包て志を見す。かの三月の糧をあつむるに力を入れず。紙布綿子など云もの、帽子したうつやうの物心々に送りつどひて霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし草庵に酒肴携來りて行へを祝、名殘を惜みなどするこそ故ある人の首途するにも似たりと。いと物めかしく覺えられけれ。

抑道の日記と云ものは、紀氏長明阿佛の尼の文をふるひ情を盡してより、餘はみな佛似かよひて其糟粕を改る事あたはず。まして淺智短才の筆に及ぶべくもあらず。其日は雨降晝より晴れて、そこに松ありかしこに何と云川ながれたりなど云事、たれ〳〵も云べく覺待れども、黃奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其處々の風景心に殘り、山館野亭の苦しき愁も、且はなしの種となり、風雲の便りとも思ひなして、わすれぬ處々、跡や先やと書集侍るぞ、猶醉る者の猛語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又亡聽せよ。

鳴海にとまりて

星崎のやみを見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたゝるけき海を中にへだてゝと詠じ給ひけるを。自らかゝせ給ひてたまはりけるよしをかたるに。

京まではまだ半空や雪の雲

三河の國保美と云處に、杜國が忍びて有けるをとふらはんと、先越人に消息して鳴海より跡ざま二十五里尋ね歸りて、其夜吉田に泊る。

寒けれど二人寢る夜ぞ頼もしき

あまつ縄手、田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き處也。

冬の日や馬上に氷る影法師

保美より伊良古崎へ一里ばかりも有るべし。三河國の地つゞきにて、伊勢とは海隔てたる處なれども、いかなる故にや萬葉集には伊勢の名所の内に選び入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらこ白と云とかや。骨山と云は鷹を打處なり。南の果にて鷹のはじめて渡る所と云へり。いらこ鷹など歌にもよめりけりと思へば、猶哀れなる折ふし、

鷹ひとつ見付てうれしいらこ崎



熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

蓬佐の人々にむかひとられて、しばらく休息するほど、

箱根こす人もあるらし今朝の雪

或人の會

ためつけて雪見にまかる紙子かな

いざゆかん雪見にころぶ處まで

或人興行

香を探る梅に藏見る軒端かな

此間美濃大垣岐阜のすきものとふらひ來りて、歌仙あるは一折など度々に及。師走十日餘り名護屋を出て舊里に入んとす。

旅寢して見しやうき世の煤はらひ

桑名よりくはで來ぬればと云。日永の里より馬かりて杖つき坂のぼる程荷鞍打かへりて馬より落ぬ。

歩行ならば杖突坂を落馬かな

と物うさの餘り云出侍れども、終に季のことば入ず。

舊里や臍の緒に泣年のくれ

宵の年空の名殘をしまんと、酒飮み夜ふかして元日寢わすれたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春

初　春

春立てまだ九日の野山かな

枯芝やや〻陽炎の一二寸

伊賀の國阿波庄と云所に、俊乘上人の舊跡有。護峰山新大佛寺とかや云名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舍は絕て田畑と名の替り丈六の尊像は苔の綠に埋れて、御ぐしのみ現前と拜まれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其代の名殘うたがふ處なく泪こぼる〻ばかり也。石の蓮臺、獅子の座などは蓬葎の上に堆く、双林の枯たる跡もまのあたりにこそ覺えられけり。

丈六に陽炎高し石のうへ

故主蟬吟公の庭にて



さま〴〵の事おもひ出す櫻かな

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂ひかな

裸にはまた衣更著のあらしかな

菩提山

此山の悲しさ告よ野老掘り

龍尙舍

物の名を先問芦のわかばかな

網代民部雪堂に會

梅の木になほやどり木やうめの花

草庵會

芋植て門は葎の若葉かな

神垣の內に梅一木もなし。いかに故有ことにやと、神司などに尋侍れば、只何とはなしおのづから梅一もともなくて子良の館のうしろに一もと侍るよしをかたり傳ふ。

御子良子の一もとゆかしうめの花

神垣やおもひもかけず涅槃像

彌生半過る程、そゞろにうき立心の花の我を道引枝折と成りて、芳野の花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にて契り置し人の伊勢に出むかひ、倶に旅寢のあはれを見、且はわが爲に童子と成りて道の便にもならんと、自ら萬菊丸と名を云、誠にわらべらしき名のさまいと興あり。いでや門出のたはぶれ事せんと笠のうちに落書す。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

よし野にて我も見せうぞ檜木笠　　萬菊丸

旅の具多きは道のさはりなりと、物皆拂ひ捨たれども、夜の料にと紙衣一つ、合羽やうの物、硯筆紙藥等書笥なんど、物に包て後ろに背負ひたれば、いとゞ臑よわく力なき身の跡ざまにひかふるやうにて道なほすゝまず。只ものうき事のみ多し。

草臥て宿かるころや藤のはな

初瀬



春の夜や籠り人ゆかし堂のすみ

足駄はく僧も見えたり花の雨　　萬菊

葛城山

猶見たし花に明ゆく神の顏

三輪、多武峰、臍峠　多武峯より瀧門へ越道

雲雀より空にやすらふ峠かな

龍門

龍門の花や上戸の土產にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろほろと山ぶきちるか瀧の音

蜻蛉が瀧、布留の瀧は、布留の宮より二十五丁山の奥也。津國布引の瀧、幾田の川上に有。大和箕面の瀧、勝尾寺へ越る道に有。

櫻

櫻狩きどくや日々に五り六り

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかげや散さくら

苔清水

春雨の木下につたふ清水かな

芳野の花に三日とゞまりて、曙黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝政公のながめにうばはれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室がこれは〱と打なぐりたるに、我いはん言葉もなくていたづらに口を閉ぢたる。いと口をし。思ひ立たる風流いかめしく侍れども、こゝに至りて無興の事也。

高野

父母のしきりに戀しきじの聲

散花にたぶさはづかし奥の院　萬菊

和歌浦

行春に和歌の浦にて追付たり



紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍のわたしを思ひ、馬をかる時はいきまきし聖の事心にうかぶ。山野海濱の美景に造花の功を見、或は無依の道者の跡をしたひ、風情の人の實をうかゞふ。猶栖を去りて器物のねがひなし。空手なれば途中のうれひもなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よりもあまし。泊るべき道の限りなく、立べき朝に時なし。只一日の願ひ二つのみ。今宵能き宿からん、草鞋の我足によろしきをもとめんと斗はいさゝかの思ひ也。時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人に出あひたる悦限りなし。日頃は古めかしくかたくななりと惡くみ捨たるほどの人も、邊土の道づれにかたりあひ、はにふ葎のうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中にこがねをえたる心地して、物にも書付け人にもかたらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし。

衣更

一つ脱いでうしろに負ぬ衣がへ

芳野出て布子賣たしころもがへ　萬菊

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を産を見て、此日においてをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな

招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目のうち鹽風吹入て、終に御目盲さめ給ふ尊像を拜して、

若葉して御目のしづくぬぐはゞや

舊友に奈良にてわかる

鹿の角まづ一ふしのわかれかな

大阪にて或人の許にて

杜若語るも旅のひとつかな

須磨

月はあれど留主のやうなり須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

卯月中頃の空も朧に殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山は若葉にくろみかゝりて時鳥啼出づべきしのゝめも海の方よりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は麥の穗なみあからみあひて、漁人の軒ちかきけしの花のたえだえに見渡さる。

海士の顔先見らるゝやけしの花



東須磨西須磨濱須磨の三處に別れて、あながちに何わざとするとも見えず。藻鹽たれつゝなど歌にも聞え侍るも、今はかゝるわざするなども見えず。キスゴと云魚をあみして眞砂の上に干しちらしけるを烏の飛來りてつかみ去る、これをにくみて弓をもておとすぞ海士の業とも見えず。もし古戰場の餘波をとゞめてかゝる事をなすにやといとゞ罪深く、猶昔の戀しきまゝに、てつかいが峯にのぼらんとする導きする子のくるしがりて、とかくいひまぎらはすをさまざまにすかして、麓の茶店にて物くらはすべきなどいひてわりなき體に見えたり。かれは十六と云けん里の童子より四つばかりも弟なるべきを、數百丈の先達として羊腸險岨の岩根をはひのぼればすべり落ぬべき事あまたゝびなりけるを、つゝじ根笹にとり付息をきらし汗をひたして、漸雲門に入こそ心許なき導師の力なりけらし。

須磨の海士の矢先に啼や郭公

時鳥消行方や島ひとつ

須磨寺や籟ぬ笛きく木下闇

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる處の秋なりけりとかや、此浦の實は秋をむねとするなるべし。悲しさ淋しさいはんかたなく

秋なりせば、いさゝか心のはしをも云出べきものをとおもふぞ、我心匠の拙きをしらぬに似たり。淡路島手にとるやうに見えて須磨明石の海左右にわかる。呉楚東南の詠も斯る處にや。物しれる人の見侍らば、さまぐ\の境にも思ひなぞらふべし。又後ろの方に山を隔て、田井の畑と云處、松風村雨ふる里といへり。尾上つゞき丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき、逆落などおそろしき名のみ殘て、鐘掛松より見下すに、一の谷内裡やしき目の下に見ゆ。其代のみだれ其時のさわぎさながら心にうかび俤につどひて、二位の尼君皇子を抱奉り、女院の御裳に御足もたれ、船屋形にまろび入らせ給ふ御有さま、内侍局女孀曹子のたぐひさまぐ\の御調度もてあつかひ、琵琶琴なんどしとね蒲團にくるみて船中になげ入、供御はこぼれてうろくづの餌となり、櫛笥はみだれて海士の捨草となりつゝ、千歳のかなしひ此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。



# 野晒紀行 貞享二年

千里に旅立て路粮を包まず、三更月下無何に入といひけん昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月江上の破家を立いづる程、風の聲そゞろ寒げ也。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸をさす古郷

關越る日は雨降て山皆雪に隱れたり。

霧時雨不二を見ぬ日ぞ面白き

何某千里と云けるは、此たび道の助けと成て、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆の交り深く、朋友に信有哉此人。

深川や芭蕉を富士にあづけゆく　千里

富士川の邊を行に三ばかりなる捨子のあはれげに泣く有。此川の早瀨にかけて浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん、小萩がもとの秋の風、今宵やちるらん明日やしをれんと袂より喰物なげて通るに。

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝ちゝに憎まれたる歟、母にうとまれたる歟。ちゝは汝を悪にあらじ、母は汝をうとむにあらじ。只是天にして汝が性のつたなき泣け。

大井川越る日は終日雨降ければ

秋の日の雨江戸に指をらん大井川　　千里

馬上吟

道のべの木槿は馬にくはれけり

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の残夢小夜の中山に至りて忽驚く。

馬に寢て殘夢月遠し茶のけぶり

松葉屋風瀑が、伊勢に有けるを尋音信て、十日斗足をとゞむ。腰間に寸鐵をおびず、襟に一嚢を掛て手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有、俗に似て髮なし。我僧にあらずといへども、髮なきものは浮屠の屬にたぐへて神前に入事をゆるさず。暮て外宮に詣侍りけるに一の華表の陰ほのぐらく、御燈處々に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむ斗ふかき心を起して、



みそか月なし千とせの杉を抱あらし

西行谷の麓に流あり。女共の芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまむ

其日のかへるさ、或茶店に立寄けるに、蝶と云ける女あが名に發句せよと云て、白き絹出しけるに書つけ侍る。

蘭の香や蝶のつばさに薫す

閑人の茅舍をとひて、

蔦植て竹四五本のあらしかな

長月の初古郷に歸ぬ、北堂の萱草も霜枯果て、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、只命有てとのみ言て言葉もなきに、兄の守袋をほどきて母の白髮拜めよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと暫く泣て、

手にとらば消ん泪ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して葛城郡竹の內と云所に至。此處は彼の千里が舊里なれば、日頃とゞまりて足を休む。藪より奥に家有り。

綿弓や琵琶に慰む竹の奥

二上山當麻寺に詣て、庭上の松を見るに、凡そ千とせも經たるならん、大さ牛をかくすとも云べけん。かれ非情といへども佛縁にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたるぞ幸にして尊し。

僧あさがほいく死かへる法の松

獨り芳野の奥にたどりけるに、誠に山深く白雲峯に重り、煙雨谷を埋て、山賤の家處々にちひさく西に木を伐音東に響き、院々の鐘の聲心の底に答ふ。昔より此山に入て世をわすれたる人の多くは、詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の廬山といはんも亦むべならずや。或坊に一夜をかりて

砧打て我にきかせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二丁斗分け入程柴人の通ふ道のみ僅かに有て、さかしき谷を隔てたるいと尊し。かのとく〳〵の清水はむかしにかはらずと見えて、今もとく〳〵と雫落ける

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば、必口すゝがん。もし是許由に告ば耳を洗ん。

山を登り坂を下るに、秋の日既に斜になれは、名ある處々見殘して、先後醍醐帝の御廟を拜む。



御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草

大和より山城を經て、近江路に入て美濃に至るに今須山中を過て、いにしへ常盤の墳あり。伊勢の守武が云ける義朝殿に似たる秋風とは、いづれの處か似たりけむ。我もまた、

義朝のこゝろに似たり秋のかぜ

不破

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りける夜は、木因が家をあるじとす。むさし野を出し時、野ざらしを心に思ひて、旅立ければ、

死もせぬ旅寝の果よ秋のくれ

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寢あきてまだほのぐらき中に濱の方に出て、

あけぼのやしら魚白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草叢に隱れかしこに縄を張りて小社の跡をしるし、こ

ゝに石をすゑて其神を名のる。遙しのぶ心のまゝに生たるぞ中々にめでたきよりも心とゞまりける。

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな

名護屋に入、道の程諷吟。

狂句木がらしの身は竹齋に似たるかな

草まくら犬もしぐるゝかよるの聲

雪見にありきて、

市人にいで是うらん雪のかさ

旅人を見て、

馬をさへながむる雪のあしたかな

海邊に日暮して、

海くれて鴨の聲ほのかに白し

こゝに草鞋をとき、かしこに杖を捨て、旅寢ながら年の暮ければ、

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といひ〳〵も山家に年を越て、



誰が聟ぞ齒朶に餅おふ丑のとし

奈良に出る道のほど、

春なれや名もなき山のあさ霞

二月堂に籠りて、

水取やこもりの僧の沓の音

京に登りて三井秋風が鳴瀧の山家を訪ふ。

梅林

梅白しきのふや鶴をぬすまれし

樫の木の花にかまはぬすがたかな

伏見西岸寺任ロ上人に逢て、

我衣に伏見の桃の雫せよ

大津に出る道山路を越て、

山路來て何やらゆかしすみれ草

湖水眺望

辛崎の松は花より朧にて

晝のやすらひとて、旅店に腰をかけて、

躑躅活けて其かげに干鱈裂く女

吟行

菜畠に花見がほなる雀かな

水口にて廿年を經て故人に逢ふ

命ふたつの中に活たる櫻かな

伊豆國蛭ヶ小島の桑門、是も去年の秋より行脚しけるに、我が名を聞て草の枕の道連にもと、尾張の國まで跡をしたひ來りければ、

いざともに穗麥くらはん草枕

此僧我に告て云く、圓覺寺の大顚和尚、ことし睦月のはじめ遷化し給ふよし、まことや夢の心地せらるゝに先づ道より其角が許へ申つかはしける。

梅戀て卯の花をがむ泪かな

贈杜國子



白けしに羽もぐ蝶のかたみかな

二たび桐葉子がもとに有て、今や東(あづま)に下らんとするに、

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名殘かな

甲斐の山中に立よりて、

行駒の麥になぐさむやどりかな

卯月の末、庵に歸り旅のつかれをはらすほどに、

夏衣いまだ虱を取盡さず

# 更科紀行

元禄元年

さらしなの里姨捨山の月見ん事、しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて倶に風雲の情を狂はすもの、又一人越人と云。木曾路は山深く道さかしく旅寐の力も心もとなしと、荷兮子が奴僕をして送らす。おの〳〵こゝろざし盡すといへども、羇旅の事心えぬさまにて、共におぼつかなく物事のしどろに跡さきなるも、中々にをかしき事のみ多し。何々と云處にて六十斗の道心の僧、おもしろげもをかしげもあらず、只むつ〳〵としたるが腰たわむまで物おひ息はせはしく足はきざむやうにあゆみ來れるを、伴ひける人のあはれがりておの〳〵肩にかけたる物どもかの僧のおひぬ物と一にからみて馬につけて、我を其上にのす。高山奇峰頭の上におひかさなりて、ひだりは大川ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず。只あやふき煩ひのみ止む時なし。棧はし、寢覺など過て、猿が馬場たち峠などは四十八曲りとかや。九折重りて雲路にたどる心地せらる。歩行より行くものさへ眼くるめき、たましひしほみて足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えず。馬の上にてたゞねふりに眠りて落ぬべきことあまたゝびなりけるを、跡より見上げて危き事かぎりなし。佛の御心に衆生の浮世を見給ふも、かゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。夜は草の枕を求めて、晝のうち思ひまうけたるけしき、結び捨たる發句など、矢立取出て燈のもとに目をとぢ頭たゝきてうめき伏せば、かの道心の坊懐旅の心うくて物思するにやと推量して、我を慰んとす。わかき時拜みめぐりたる地、あみだの尊き、數を盡しおのがあやしと思ひし事共話つゞくるぞ風情のさはりとなりて何を云出る事もせず。とてもまぎれたる月影の壁の破れより木の間がくれにさし入て、引板の音鹿おふ聲處々に聞えける、まことに悲しき秋のこゝろこゝに盡せり。いでや月のあるじに酒ふるまはんといへば、盃持出たり。よのつねに一めぐりも大きに見えてふつゝかなる蒔繪をしたり。都の人は斯るものは風情なしとて手にもふれざりけるに、思ひもかけぬ興に入つて精碗玉巵の心地せらるゝも處から也。

あの中に蒔繪書たし宿の月

棧しやいのちをからむ蔦かつら

棧しやまづおもひ出づ駒むかへ

霧はれて棧は目もふさがれず　越人

姨捨山は、八幡と云里より一里斗南に、西南に横をれて、すさまじく高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず、只あはれ深き山のすがたなり。なぐさめかねしといひけんも、ことわりしられてそ

ゞろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いとゞ涙もそひければ、

俤や姨ひとり泣月の友

いざよひもまた更科の郡かな

ひよろ〳〵と猶露けしやをみなへし

身にしみて大根からし秋の風

木曾の橡うき世の人のみやけかな

送られつおくりつはては木曾の秋

善光寺

月影や四門四宗も只ひとつ

吹飛す石は淺間の野分かな

更科や三よさの月見雲もなし

越人



# 嵯峨日記 元祿四年

元祿四辛卯月十八日、嵯峨に遊びて、去來が落柿舍に至る。凡兆共に來りて、暮におよびて京に歸る。予は猶暫くとゞむべきよしにて障子つゞくり、葎引かなぐり舍中の片隅一間なる所伏處と定む。机一、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置、唐の蒔繪書たる五重の器にさま〴〵の菓子を盛り、名酒一壺盃そへたり。夜のふすま調菜の物共京より持來て貧しからず。我貧賤を忘れて清閑を樂む。

十九日午半、臨川寺に詣。大井川前に流れて、嵐山右に高く松の尾の里につゞけり。虚空藏に詣る人ゆきかひ多し。松の尾林の中に小督やしきと云有。すべて上下嵯峨に三所有。何れかたしかならん。かの仲國が駒とめたる處とて、駒止めの橋と云。此あたりに侍れば、暫くこれによるべきにや。墓は三軒屋の隣藪の中に有。しるしに櫻を植たり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終に藪中の塵芥となれり。昭君村の柳、巫女廟の花のむかしも思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪のしげりや風の筋

斜日に及で、落柿舍に歸る。凡兆京より來る。去來京に歸る。宵より臥。

廿日、北嵯峨の祭見んと羽紅尼來る。去來途中の吟とて語。

　つかみあふ子供のたけや麥ばたけ

落柿舍は昔の主の作れるまゝにして、處々頽破す。中々に作りみがゝれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁畫る壁も風に破れ、雨にぬれて奇石怪松も葎の下にかくれたる、竹縁の前に柚の木一本花芳しければ

　柚の花やむかし忍ばん料理の間

　ほとゝぎす大竹藪をもる月よ

　またやこんいちご赤らめ嵯峨の山

去來兄の方より、菓子調菜のものなど贈て、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一張に五人こぞり臥たれば、夜もいねがたくて夜半過る頃よりも各起出て、晝の菓子盆など取出て曉近き迄話明す。去年の夏凡兆が宅に臥たるに、二疊の蚊屋に四國の人ふしたり。思ふ事四にして、夢も又四種と書捨たる事もなど云出して笑ひぬ。明れば羽紅凡兆京に歸る。去來猶とゞまる。

廿一日、昨夜は寢ざりければ心むづかしく空のけしきも昨日に似ず朝より打曇り雨折々おとつれて



終日眠り臥たり。暮に及て去來京に歸る。今夜は人もなく晝臥たれば夜も寢られぬまゝに幻住庵にて書捨たる反故を尋出してなぐさみに淸書す。

廿二日、朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝにむだ書して遊ぶ。其詞。

　喪に居るものは悲しみをあるじとし

　酒を飲ものはたのしみを主とし

　愁に住するものは徒然を主とす

　徒然に住するものは徒然を主とす

淋しさなくばうからましと、西上人のよみ侍るは、淋しさを主なるべし。又よめる。

　山里にこはまた誰をよぶこ鳥ひとりすまんと思ひしものを

獨すむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば主は半日の閑をうしなふと。素堂常に此言葉をあはれむ。予も又

　うき我を淋しがらせよかんこ鳥

とは或寺に獨居していひし句也。暮方去來より消息す。乙州が武江より歸り侍るとて、朋友門人の消息共あまたとゞく。其中曲水が狀に、予住捨し芭蕉の舊跡を尋て宗波に逢よし。

むかし誰小鍋あらひしすみれ草

又云

我すみ處、弓杖二長ばかりにして楓一本より外は青き色を見ずと書て、

わか楓茶色になるも一さかり

嵐雪が文に

狗脊の塵にえらるゝわらびかな

出代やをさな心に物あはれ

其外の文共哀なる事なつかしき事のみ多し。

廿三日

手を打ば木魂に明る夏の月

夏の夜や木魂に明る下駄の音

竹の子やをさなき時の繪のすさみ

麥の穂や淚にそめて鳴雲雀

一日〳〵麥あからみて鳴雲雀



能なしの眠たし我をぎやう〳〵し

廿四日。題落柿舎

豆植る畑も木部屋も名處かな　凡兆

暮に及で、去来京より来る。膳所昌房より消息、大津の尚白より消息あり。凡兆来る。堅田本福寺訪。春伯凡兆京に歸る。

廿五日。千那大津に歸る。史邦丈草見訪。

題落柿舎　丈草

深對峨峯伴鳥魚　就荒喜似野人居

枝頭今欠赤虬卵　青葉葉頭堪學書

尋小督墳

強攪怨情出深宮　一輪秋月野村風

昔季僅得求琴韵　何處孤墳竹樹中

芽出しより二葉に茂る柿の實　丈草

途中の吟

ほとゝぎすなくや榎も梅さくら　史邦

黄山谷之感句

杜門覓句陳無已　對客揮毫秦少游

乙州來て、武江の話並燭五分の誹諧一巻、其中に

半俗の膏藥入はふところに　其角

臼井峠を馬にかしこき

腰の簀に狂はする月

野分より流人にわたす小屋一つ

宇都の山女に夜着を借て寢る

偽せめてゆるす堪忍

申の剋斗より、雷霆雹降雲龍空を過る時雹降大なるは唐桃のごとし小さきは柴栗のごとし

廿六日。

芽出しより二葉にしげる柿の實　丈草

はたけの塵にかゝるうの花　芭蕉



蝸牛たのもしげなき角振りて　去來

人のくむうち釣瓶まつなり　丈草

有明に三度飛脚の行やらん　乙州

廿七日。人來らず。終日得閑。

廿八日。夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺る。心氣相交る時は夢をなす。陰盡て火をゆめみ、陽おとろへて水を夢見る。飛鳥髪をふくむ時は飛鳥をゆめ見、帶を敷寢する時は蛇を夢みると云り。睡枕記に槐安國莊周夢蝶皆其理有て妙をつくさず。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の氣夜陰に夢又しかり、誠に此ことを夢みるこそ所謂念夢なれ。我に志深く伊陽舊里迄したひ來りて夜々床を同じく起ふし、行脚の勞をたすけて百日が程影のごとく伴ふ。片時も離れず。或時はたはふれ、或時は悲しみ、其志吾心裏に染て、忘るゝ事なければ成べし。覺て又袂をしほる。

廿九日。日暮て奥州高館の詩を見る。

高館聳天星似冑　衣川通海月如弓

其地の風景聊以不叶古人不至其地時以不叶其景

卅日。朔日。

江州平田明照寺李由訪る。尙白千那有消息。

竹の子やくひ殘されし後の露　李由

此ごろの肌着身につく卯月かな　尙白

遣歟

またれつる五月もちかし聟粽　同

二日。

曾良來りて、芳野の花を尋ね、熊野に詣侍るよし。武江舊友門人の話、かれこれ取まぜて談す。

熊野路やわけつゝ入は夏の海

大峰やよしのゝおくを花の果

夕陽にかゝりて、大井川に舟を浮べて、嵐山にそうて戸難瀨を登る。雨降出て暮に及て歸る。

三日。昨夜の雨降つゞきて終日終夜止す。尙其武江の事共問語。旣に夜明る。

四日。宵に寢ざりける草臥に終日臥。晝より雨降止。明日は落柿舍を出んと名殘をしかりければ、奥口の一間々々を見めぐりて、

五月雨や色紙へぎたる壁の跡



# 句評

# 貝おほひ　寛文十二年

小六ついたる竹の杖ふし〳〵多き小歌にすがり、あるははやり言葉のひとくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれふしにうたはしめ、其かたはらにみづからはみぢかき筆の辛氣ばらしに、清濁高下を記して、三十番の發句合を思ひ太刀折紙の式作法もあるべけれど、我まゝ氣まゝに書ちらしたれば世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見るものなれは也。又神樂の發句を卷軸に置ぬるは歌にやはらぐ神心といへば小うたにも予がこゝろざす所の誠をてらし見給ふらん事をあふぎて、當所あまみつおほん神のみやしろのたむけぐさとなしぬ

寛文十二年正月廿五日　伊賀上野松尾氏　宗房

釣月軒にしてみづから序す　松尾氏宗房撰

一番

左　勝

にほひある色や伽羅ぶしうたひ初　三木